東京怪談　～仮想明治幻想奇譚～

叶井藤彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東京怪談　～仮想明治幻想奇譚～

【Ｎコード】
Ｎ９３７４Ｗ

【作者名】
叶井藤彦

【あらすじ】
――この世は、穢れに満ちている。人から生じた穢れは歪んだ形を持って「宿主」に憑りつき、怪異を引き起こして「怪談」を紡ぐ。生まれ落ちた「怪談」は人の口を伝わって人の中へと滲んでいき――人を、喰らう。
時は明治七十二年。天皇が不老不死となり、停滞したまま栄え続ける首都・『東京』。異端の少年「長政」は、ある廃寺で「讀師」の少女と出会う。狂い咲きの桜が紡ぐ「怪談」の中、二人が出会った事で物語は密やかに始まる。仮想明治を舞台としたオカルトファン

タジー。　※ホラーカテゴリですが基本的に事件解決に重きを置いています。

怪談の穢れ

――この世は、穢れに満ちている。
人は、ただ普通に善良に生きていたとしても、その身からは「穢れ」というものが常に発生し、溜まっている。死や、出産、疫病、人が混じりあった為に起こる犯罪、そして何より、禍々しい人の悪意によってそれらは増幅し、留まっていく。

いつしかそれは、形を持つ様になっていった。虫や獣の姿を模しているそれは、どこかが崩れ、歪んだ形をしていた。
実体化した「ケガレ」は、人のいる所に寄り集まり、その中で最も澱み、最も歪み、最も世の理に反したモノに巣食う。
「宿主」となったモノは、「百奇（ひゃっき）」と呼ばれるものを産み出し、そのモノの「穢れ」に起因した怪異を起こして「怪談」を作り出す。
「怪談」は人の口を伝って伝染し、広まっていく。それは一種の結界を作り出し、その中へと人を誘い込み、喰らう。
「怪談」は、倒せない。
「怪談」は、死なない。
伝染した「怪談」が確固としてあり、恐怖を撒き散らし続け、人を喰らい続ける限り、紡がれた「怪談」は、消す事が出来ない。人はただ、「怪談」が肥え太っていく為だけの餌だった。

対抗する手段は無く、そもそも「ケガレ」の存在を視認出来る者は一握りだった。
けれども彼らは、何も知らないながらも足掻く。
「怪談」を読み解き、様々な術を掻き集めて結界に入り込む方法を探り、「宿主」を見つけ出す為に奔走した。「宿主」を潰した時、

死なない筈の「怪談」は、この世に塵も残さず消え失せた。その時、彼らは理解する。

即ち、「怪談」を倒す為には「怪談」を読み解き、結界に入り込み、元凶となる「宿主」を探し当てて潰さなければならない、と。

対抗手段を見つけ出した彼らは、「怪談」と戦い、巻き込まれる無辜（むこ）の人々を救う事を選んだ。

彼らはいつしか、自分達をこう呼ぶようになる。

「怪談」を読み解く者――讀師（よみし）、と。

不老不死の天皇

明治という時代になって、まだ日は浅い。やらねばならぬ事、変えてゆかねばならぬ事はそれこそ山の様にあった。政府の高官共が西洋に並び立つ様な強く勇ましい国を作るのだと日夜奔走していたある日の事である。豪奢な部屋の、これまた豪奢な机に掛ける天皇様が、傍にいた駆け出しの青年政治家にふと、声を掛けた。

「ヤァ君、聞いてくれないか。実は私は、死なない体というものを持っているのだよ」

「……ハァ」

――ああ、お可哀想に。上様は大分疲れていらっしゃる。

青年の哀れんだ瞳に何を読み取ったのか、当の天皇は不満げに口を尖らせた。どうやら、もっと驚いて欲しかったらしい。

「なんだい、信じていないね？　マァいいさ。ちょっと君、良く見ていなさい」

そう言うと、天皇は何処からか小刀を取り出した。小ぶりながら良く砥がれていて、鋭い刃が銀色に光っている。天皇はその小刀を手で見せつける様に弄び、

「えい」

勢い良く、己の喉笛に突き立てた。

偶然太い血管に当たったのか、赤い血が勢いよく吹き出す。刃を持つ手は、それに一向に構わずに、手にしっかりと握った銀で喉の肉を裂いていく。ぐじゅり、じゅぷりと不快に濡れた音が部屋に響

いた。青年と天皇以外にもその部屋に人はいたのだが、誰も、言葉を発する事が出来ずにいた。
　じゅぐ、と一際不快な音を立てて刃が首から引き抜かれた。喉の肉は掻き荒らされ、白い骨を覗かせている。筋も血管も滅茶苦茶に引き裂いているのか、血が喉自身が脈打っているのかの様に流れ出す。どうみても生きてはいないであろう傷だった。だというのに、当の天皇はどこ吹く風といった風で、緩やかに笑っている。
誰も、言葉を発さない。部屋の中の誰もが狂った様な光景を前に動けず、喋らない。そして、皆の見守る中で「それ」は起こった。
　ぱっくりと真一文字に裂けた傷跡。赤黒く開かれたそれが、やにわに蠢いた。もう一つの口の様に喉から流れ出た、傷口と衣服を存分に汚した血を啜る。粗方飲み干すと、大きく開かれた口はむずがる様に震えた。みちり、という音を立て、周りの肉も震えだす。その度に、肉やら筋やらが触れ合うぐちゃぐちゃという音が大きく響く。
信じられない事に、それは再生しているのだった。見えない糸と針があるかの様に、首の中程までに達している傷が、ぷつぷつという音を立てて、繋がっていく。肉が、筋が、血管が。滅茶苦茶に蹂躙されたそれらが、元の姿に戻っていく。その光景は、手品を見ているかの様な錯覚に陥らせた。

　ぷつぷつぷつぷつぷつぷつぷつぷつっ。

　音が、止んだ。先程無惨な傷口を晒していた喉は、跡すら残さずに元通りとなっている。天皇は小刀を持っていたのとは逆の手で喉をさらりと撫で、皆の顔を見回して言った。まるで、悪戯に成功した子供の様な笑顔で。
「サア、これが不死の体という奴さ。凄いだろう？」

この一言の後、我に返った人々の悲鳴で阿鼻叫喚。上へ下へと、ひっくり返した様な大騒ぎになったのは言うまでもない。

その場にいた者、いなかった者を巻き込んで、東京の要人共全員を巻き込んでの大騒ぎとなった。その場にいなかった者の多くは夢幻(ゆめまぼろし)や手品の類を疑ったが、その声が上がる度に天皇自身が喉やら腹やら胸やら眼やらを抉っていったものだから、皆顔を青くしながら信じるしかなくなった。これ以上ない立証の方法ではある。信じがたい出来事ではあっても、天皇が「不死の体」というものになってしまった事を疑う者はいなくなった。さて、そうなると何故そうなってしまったかについての疑問が上がった。当然と言えるものであったが、これについては天皇は「人魚の肉を食べたのさ」などとはぐらかす様な事を言ってお茶を濁すばかりであった。

更にいうには、今は証拠を見せる事は出来ないが、天皇は不老の体にもなったという。不老不死という奴になったので、この国の指揮を永遠に取れる事になったんだ、と笑顔で言う始末である。永遠に生きるとなって心の方も様変わりした様で、焦って西洋に追いつこうと肩肘張るより、向こうの文化を適度に取り入れて江戸の頃の様にのんびりゆっくりやろうじゃないか、と政治の方針を根本から引っ繰り返す様な事を言った。これには、今まで強い国作りに苦心してきた政治家達が流石に異を唱えた。それからの騒ぎは、とても言葉に表せない。謀略に謀略を重ね、どんな手を使ったのやら最終的には天皇の勝ちとなった。それからは一転、西洋に追いつけ追い越せの政治から、良く言えば穏やかな泰平、悪く言えば停滞し、堕落した世に切り替わった。急な転換による民の戸惑いはもっともな物であり、天皇が不老不死になったという世迷言の様な報道による騒ぎもそれはそれは大きいものだった。だが、そうしている間にも時は移ろいゆく。十年経つと、人々は停滞した平和に慣れた。二十年も経つと、天皇が不老不死だという事が自然に人々に受け入れら

れていく。その間にも、天皇は自身の言葉通り全く老いずにいた。正真正銘、不老不死という奴だった。

停滞した流れの中でも、西洋の技術、文化は取り入れられ続け、『東京』という地に蓄積されていった。それらは何故か国の隅々まで散らばる事は無く、『東京』に留まり続け肥大していった。今や『東京』は周辺の関東圏の国の一部までも呑み込み、特異な存在となっている。『東京』という場所の、他の地とは違う異質さを知る人々は、時として「大日本帝国の中にもう一つ、『東京』という国がある様だ」と揶揄するのだった。

だが、その様に揶揄されていても、『東京』の華やかさに惹かれ、地方から上京する者は後を絶たない。いつしか『東京』とそれ以外の『外』は、明確な差が生まれる様になった。それは、技術や文化の格差が殆どだったが、人の意識の違いも存在していた。『東京』が西洋に触れ、開放的になっていくのと比例する様に、『外』の人々の排他的な意識は高まっていった。東京では当たり前に受け入れられる洋装・異人も『外』では迫害され易い。もっとも、名古屋や大阪、京都などの栄えている都市がある地ではそれ程でもない。酷いのは、それらの豊かさ、華やかさとは縁遠い場所だった。そこでは、「他と違う」という「異端」は白い眼で見られ、石を投げられる事位は覚悟せねばならなかった。

『外』に明らかな歪みを育みながら、それでも、人を、技術を、他国の文化を、咀嚼し、『東京』は、停滞しつつも成長し続けた。その姿は、時間も命も止めてしまった天皇に重なるものでもあった。

そして時は流れ、明治七十二年――

一、　異端少年

「……参った」

言葉の割に困惑や焦りが読み取れないその台詞は、誰が聞く事も無く夜闇の中に呑み込まれていった。月は空高く昇り、辺りからは物音一つ聞こえない。

明治の世となってからは珍しい、豪奢（ごうしゃ）な武家屋敷の染み一つない白壁の塀に寄りかかり、一人の少年が座り込んでいた。

年の頃は十七、八程だろう。古臭い和装に、体の横に置いた荷物。『東京』に毎日山の様に訪れる地方からの上京者である事は一目瞭然だった。少し変わった所と言えば、今は座り込んでいるが、立ち上がれば恐らく六尺を越える長身である事、頭に何故か使い古した手拭いを巻いている事、廃刀令が出たのは随分と昔の事だというのに、刀を一振り、その手に持っている事、そして、少年の瞳は日本人ではありえない澄んだ深緑色をしていたという事だった。

少年の顔の造りからは異国の血が混じっているとは考え辛く、彼は周りから見て明らかな異端を抱えていた。

その、異端を。硝子玉の様に澄んだ、感情の読み取れない瞳を瞬かせながら、少年はもう一度呟く。

「参ったなー。なぁ？」

にゃー

突然の呼び掛けに、少年の横で毛繕いをしていた三毛猫が一声答えた。丸々と太っており、肉と毛に覆われて分かりにくいが、首輪をしている事から飼い猫だろうという事が分かった。首輪には細かな装飾が施された銀色の鈴が付けられており、飼い主の趣味の良さ

と財力が予想出来る。
返答が貰えた事に満足したのか、少年が三毛猫の頭を撫でてやると、三毛猫は喉をごろごろと言わせて少年の手の甲に頬ずりした。季節は初夏で、動物の生温かい体温は煩わしくなってくる頃だったが、擦り寄ってくる猫をはねのける程無慈悲でも無い。歩き通しで疲れていた事もあり、暫し、猫と戯れる事にした。

少年の目的は、当座の宿を探す事だった。
上京者の大半は、多かれ少なかれ夢や希望を抱いて『東京』にやって来る。『外』から列車に揺られて『東京』を訪れる彼らは、親戚や知り合いの居る者はそれらを頼り、伝を持たない者は何日かは生活に困らない程の金額を携えて上京して来るのが普通だった。だが、中にはそういった夢や計画を全く持たずに、身一つで上京して来る者もいる。少年は、後者だった。
列車の代金が、始まった当初に比べると随分安くなっているとはいえ『東京』行きの切符はまだまだ『外』の者からすれば高級品である。夜行の最終便、三等の切符であっても少年の懐には随分と致命傷だった。お陰で懐は真冬の如し。早急に金のかからない宿を探す必要があった。贅沢は望んでいない。雨風凌げて屋根があれば十分、寝転がれる程の広さがあれば恩の字だ。
「んー、お前さ、何処かいい所知らない？」
にゃー
「このままだとさー、野垂れ死にしそうなんだよね、俺」
みゃあ
「それは流石にちょっと困るしなー」
にゃあお
「俺の話聞いてるー？」
なー
人の言葉を理解しているのか、三毛猫は少年の呟きに相槌を打つ

様に鳴き声を上げた。気を良くした少年が三毛猫の大きな体を抱きかかえてやると、気持ちよさそうに目を細める。

猫の背を撫でながら、少年は辺りを見回した。背を凭れかけている白壁の塀は、夜闇も相まって果てが見えない。少年が見た堅牢そのものといった門扉の造りを見ても、この屋敷が随分と広大なものだという事は容易に知れた。ここに来るまでの間にも何軒か立派な造りの家を見かけたが、これだけ裕福な屋敷は初めて見る。存外今撫でている三毛猫もこの家の飼い猫かもしれないと、頭の端で考えた。

『東京』の地理など全く分からないので出鱈目に歩いて来たのが災いした。この辺りは『東京』の最大の特徴である西洋の文化や技術をあえて排除している様で、『外』と同じくまだこの土地が江戸と呼ばれていた頃の造りの建物が多い。上京早々西洋風の建物の厳めしさに苦手意識を抱いた青年にはこの光景は有り難いものだったが、建っているのはそれなりに立派な家々ばかりで、少年の宿になりそうな所は皆無だった。

違う方向に行けば、空き家か廃屋か、そういったものが見つかるかもしれない。だが、この辺りにはガス灯も無く、月の光だけが頼りだった。こんな夜闇の中を行き辺りばったりで歩いて変な所に出たら面倒な事になる。駅の方に戻ろうにも、角があれば取りあえず曲がるといった進み方をしてきたせいで道を覚えていない。歩き通しで足も疲れている。正に八方塞がり、という奴だった。

「参ったなー」

にゃお

少年は弱音を吐くが、その声色からは状況と言葉に相応しい感情が全く含まれていなかった。まるで、寂しさや、不安や、焦りいった感情を最初から持っていないかの様に。

「お前さ、本当に何処か知らない？　教えてくれたら煮干しでも鯵

でも鮪でも奢ってやるからさあ」
にゃー
「金なら大丈夫だって。成金の金持ちの財布でもスればいいからさー」
にゃー
「それに俺『受けた恩義は必ず返せ』って教わったしなー。お前が猫だろうと踏み倒したりしないよ」
にゃー
「……」
にゃー
「……にゃー」
みゃあお
「……虚しくなって来た」
肩を落とした少年を励ます様に、三毛猫がその頬を舌で嘗める。ざらついた舌の感触がこそばゆい。少年は薄く笑いながら猫の両脇を持ち上げ、目線を合わせた。
「んー、慰めは嬉しいけどお前が雌だったらもっと嬉しかったなあ……」
その言葉に気分を害したのか、三毛猫は思いの外鋭い牙を剥き、しゃあ、と威嚇する様に鳴いた。だが、丸々と肉の付いた体と、短いながらもふっさりとした毛に覆われた顔では今一迫力というものを感じられない。
少年は苦笑しながら、詫びの意味も込めて三毛猫の頭を撫でてやった。ごろごろと喉が鳴る。
「しかし、弱ったなあー。このままだと本当に野垂れ死にか行き倒れだよなあ、俺」
少年の瞳は相変わらず感情の読みとれないものだったが、流石に参っているらしく表情が少しだけ暗い。
少年に撫でられるがままだった三毛猫は、その感情の機微を読みとったのか、不意に少年の腕の中からひらりと身を踊らせた。その

まま、太った体からは予想出来ない程優雅に着地する。

「ん？　どうした？」

少年の問いかけの言葉には反応せず、猫はそのまま歩き出す。その姿はやけに堂々としており、気品の様なものを感じさせる。

少年が三毛猫の後ろ姿を見送ったままでいると、猫は首だけを動かして少年の方を向いた。そして、促す様ににゃあ、と一際声高く鳴く。

「……着いて来いって事？」

少年の疑問は黙殺し、猫は再び前を向いて歩き出す。白い、立派な尻尾が左右にゆらゆらと揺れている。暗闇の中で目立つそれは、手招きしている様にも見える。

少年は、荷物と刀を掴み、慌てて立ち上がった。このまま此処に座り込んでいても、何も変わらない。それだったら、怪しかろうと進んだ方が幾分マシだ。少年は、随分と先へ行ってしまった猫の後を、足早に追いかけた。

「……寺？」

三毛猫を追いかけて、どれだけ歩いただろうか。導かれるままに進んだ先には、小さな寺があった。荒れ果て、人の居る気配は無い。周りに家なども無く、住職のいない廃寺の様だった。少年の宿にうってつけだ。どうやら、あの三毛猫は本当に案内してくれたらしい。

礼を言おうと足下を見ると、先程までそこにいた三毛猫の姿は、影も形も無くなっていた。立ち去ったのならば足音位は聞こえそうなものだが、それすらも無い。まるで闇に溶けてしまったかの様に、猫の存在はかき消えていた。少年はそれを少し不思議に思ったが、

直ぐにその疑問を打ち消した。
何となくあの猫とはまたこれきりでは無い様な気がしたし、第一早く体を休ませたかった。恐らくあの屋敷の近くにいけばまた会えるだろう。
取り留めの無い事を考えながら、少年は、目の前の寺に向かって歩を進めた。
造られてから大分時間が経っているであろう門は開いていたが、人が居ないとはいえ正面から侵入するのははばかられた。ぐるりと周り、塀を越えて入る事にする。無人の寺にわざわざその様な方法を取って入る事は滑稽に思えるが、正面から入るのは落ち着かないのが少年の性(さが)だった。
背中に荷物を背負い、煤けた壁に刀を立て掛ける。普通より長い下げ緒を口にくわえ、刀の鍔を足掛かりに一気に塀の上の屋根瓦までよじ登った。こういう時、己の身の軽さと長身に感謝せずにいられない。下げ緒を手繰り寄せ、下に残していた刀を引き上げた瞬間、背後、つまり塀の中側から、涼やかな声が掛けられた。

「あの、そこで何をしていらっしゃるんですか?」

突然声を掛けられ、少年の心臓が跳ね上がる。慌てて振り返ろうとし、狭い屋根の上で、少年の体はあっさりと均衡を崩した。
「あ」
意味の無い言葉が口から零れる。本人にとってはやけに緩慢に、他者から見ればそれ相応の勢いで、少年の体は屋根の上から転落した。
鈍い落下音と共に、二つの声が上がる。
「きゃっ!」
「いっだぁっ……!!」
運良く頭から真っ逆様に落ちる事は免れた少年は、全身に走る痛みに呻いた。荷物が緩衝材となったとはいえ、背中を強く打った。

暫くはまともに声も出せない。目の端に涙が滲む。起き上がる事も出来ない少年の耳に、人の駆け寄る足音が聞こえてきた。
「――あ、あなた、大丈夫ですか！？　ああ、ごめんなさい、私が声を掛けたばかりに……！立てますか？　何処か痛む所は？」
少年の身を心配し、矢継ぎ早に掛けられる声。とはいえ、文句の一つも言ってやらないと気が済まない。少年は声の主の姿を見ようと瞼を開き――何も、言えなくなった。
涙で霞む視界の中、夜空を背に浮き世離れした格好の少女がしゃがみこみ、少年を心配そうに覗き込んでいる。桃色の水干に、膝より上の丈の緋袴。腰まであるさらさらと艶やかな黒髪は、真っ直ぐに切り揃えられ、頭には板状の変わった形の髪飾りが付いている。白い肌に、光を幾つも孕んだ黒い瞳。とても綺麗な少女がそこにいた。

二、　孕む桜

女衒(ぜげん)にでも売ったら高そうだ、と、育ちの悪さから、ついそんな事を真っ先に考えた。少女は自分にその様な下世話極まり無い評価が下されている事も知らず、瞼を開けた少年を見て、顔を綻(ほころ)ばせた。少年の身に大事が無い事が、心底嬉しいという様に。とても久しぶりに善意に溢れた表情を向けられ、少年は戸惑う。

とにかく、いつまでも土の上に寝転げていてもしょうがないと痛みを堪(こら)えて上半身を起こすと、少女は労わる様に少年の背中を摩(さす)った。背中に鈍い痛みが走り、少年が顔をしかめると、少女が申し訳なさそうな顔をした。

「……ごめんなさい。まさか、落ちるとは思わなくて」

「……いいよ。俺が鈍くさかっただけだし」

気にするな、と言ってみても、少女の表情の陰りは取れない。随分と真面目な性格の様で、責任を感じているらしい。そこまで少女を観察した所で、少年の頭に一つの疑問が浮かぶ。

この少女は、一体何者なのか。この寺の娘というのは考え辛い。寺は外から見て分かる程荒れ果てており、人が住んでいるとは到底思えなかった。それに、少女の格好はいやに古めかしく、仏道に帰依する者の服装ではない。まさかのまさか、幽霊という訳でも無いだろう。

不意に浮かんだ考えを、少年は一蹴した。聞いてしまうのが一番手っとり早い。少年は疑問の言葉を口にしようとし、

「あの……ところであなたは、どこの方なのですか？」

先を越された。
首を傾げ、綺麗な瞳でこちらに問いかけて来る少女の前で、少年は先程とは違う意味で何も言えなくなった。

うっかり失念していたが、今の少年はこの寺にとっては侵入者だ。誤魔化そうにも塀を越える所をばっちり見られてしまったのだから言い訳のしようが無い。こんな事なら正面から入れば良かったと、少年は後悔する。

正直に白状するか、それとも騙して言いくるめるか。正直に言った方が、好感を持たせて事が運びやすくなるかもしれない。幸い人の良さそうな子だから、勢いに乗せれば上手く誤魔化せそうだ。
だが、打算的な考えに頭を働かせていた少年は、屈託無く話す少女の次の言葉に、強制的に止められる。

「わざわざ結界を破らなくても、事前に仰って頂ければ待っていましたのに……。あなた、三釘（みつくぎ）の方ですか？　佐武（さたけ）の方ですか？　それとも、ウチの新しい讀師（よみし）でしょうか？」

「……あんた、今何て言った？」
「え？」

聞き返され、少女は初めて怪訝な表情を浮かべた。訳が分からないといった様子だが、それはこちらも同じだった。
「結界とかヨミシ？　だとか、あんた一体何者だ？　この寺の人……じゃなさそうだな。」
少年の疑問に、少女の顔色が僅かに変わる。浮かぶ感情は、疑念。
「あの……一つ、お聞きします。あなた、この場所にどうやって入ったのですか……？」
「どうって……あんたも見てただろ？　塀を昇ったんだよ」

少年の返答に、少女の顔から血の気がさあっと引いた。そして、先程までの様子とはうって変わって取り乱し始める。
「嘘……そんな事って、でも……あり得ないけど、ああ…どうしよう……！」
事情の飲み込めない少年は、呆気に取られてただ少女を見上げていた。少年のそんな様子に気づいた少女は、勢い良く立ち上がり、険しい表情で声を掛けた。
「……立って下さい」
「え？」
「いいから早く！！」

命令するかの様な激しい口調に押され、少年は慌てて立ち上がる。座っている時は気付かなかったが、少女が随分と小柄な事に気付く。背丈は少年の胸の辺り位までしかない。そんな事はお構いなしといった風に、少女は少年の腕を掴むと、有無を言わさぬ口調で告げる。
「……一刻も早く、ここから出て下さい。門の所までは私が付いていきますから、門から出たら絶対に振り返ってはいけません。そのまま走って逃げて下さい」

「何で」

理不尽な申し立てに、少年は反射的に反発する。
「説明している暇はありません……！いいから、あなただけでも早く逃げないと――」
「だからどうして！逃げるって何から！？」
「説明している暇は無いと言っています！いいから急がないと、アレが――」

べちゃ

激しい口論の中、突如湿った音が響いた。さして大きい音では無い。けれども、少女の言葉を遮る程の存在感があった。それは、例えるなら限界まで熟した果実が、木から落ちた際に発する様な音をしていた。何か、柔らかいものが潰れた時の音だった。

少女の顔を、一瞬にして絶望が塗り潰した。ぎこちなく、音が発せられた方へと首を動かす。少女の只ならぬ様子に、少年もつられてその方向へと視線を向けた。

そこにあるのは、何の変哲も無い桜の大木だった。鮮やかに、薄桃色の花々を咲かせている。月の光に照らされて、幾分か妖しさすら感じられる。

桜の花は、満開だった。

もう春はとうに過ぎ、今は梅雨時を目前とした初夏の季節であるというのに。

先程まで、その桜の木はそこに存在していなかったというのに。

小さく、可愛らしい花達。その中に、一際目立つ蕾があった。「それ」は、植物では有り得ない色と質感をしていた。花びらもがくも無く、ぬらぬらとくすんだ肉色をしており、細い血管が表面に脈打っている。人の頭程の大きさをしており、「それ」が花達に混ざって咲いていた。

花では無い何かを宿していたのか、「それ」は中から破れ、裂けた肉片の端から透明の液体をぽたぽたと滴らせていた。

中の「モノ」は落ちて、下に。

にちゃ　ぐちゅ　じゅぐ

狂い咲きの桜の根本、「それ」は蠢いていた。肉の色と血の色をした、何か。肉の蕾から生まれた、何かの形を成そうとしている、何か。粘液に塗れたそれが蠢く度に、ぐちゃぐちゃとおぞましく濡れた音が響く。震える肉の中から、手や足や、人の体の一部が垣間見えた。それらは潰れた肉塊の中でざわざわとぐちゃぐちゃとどろどろと混ざり合い溶け合い纏わりついて合わさって――

歪つな、赤子の姿になった。

皮膚は人の肌色よりも薄赤く、中の肉と血管の色が透けて見える。手足は異様に小さく、それ以外は水膨れの様にぶよぶよとした肉が蠢いていた。頭が不吊り合いに大きく、顔の造作もまた歪つである。鼻は潰れて二つの穴だけを残し、口は真一文字に裂けている。瞼は無く、一際薄い皮膚の下に、眼と思わしき二つの黒い球体が忙しなくぐるぐると動いているのが透けて見えた。

少年の足は、地面に縫いつけられたかの様に動かす事が出来ない。少女に掴まれた腕が、じんじんと痛む。少女の方を横目で盗み見ると、血の気の引いた顔で眼前の肉塊とも人形ともつかない「異形」を睨みつけていた。

四方八方に向いていた黒い球は次第に動くのを止め、離れた所に立っている少年と少女にぴたりと、照準を合わせる。

――眼が、合った。

何処を向いているのか分からない、黒目ばかりの眼球。けれども、少年はそれの動きが止まった時、本能的にそう感じた。赤子の方もそれに気付いたのか、大きく裂けた口を、にい、とつり上げて笑った。

途端、少年の視界が急に真っ白になった。隣に立っている少女も、目の前で笑う「異形」も、花びらを散らしている桜の木も、何もかも全て眩しい白で塗り潰され、ただそこに見えたモノは――

「――危ないっ！！」

不意に、鋭い声と共に強く突き飛ばされた。意識を飛ばしていた為受け身も取れず、少年は地面に倒れた。その痛みで、ようやく我に返る。

今の光景は一体、何だったのか。

だが、少年の疑問は自分を突き飛ばした少女の姿を見て、跡形も無く打ち消される。

「……おい、大丈夫かあんた！」

「う……」

駆け寄り、心配する声を上げる少年に、少女は只低く呻いて答える。

辺りに、血が飛び散っていた。少女の右脚は膝までずたずたに切り裂かれ、白い足袋を赤く染めていた。血溜まりが広がり、鉄臭い臭いが漂う。血溜りの赤の中に、ぽつぽつと白い色が見える。それは、芋虫の様に柔らかい肉で覆われ、人間の指の形をしていた。それが、少女の足に纏わりつき、蛭の様に蠢いている。じゅるり、じゅるり、と音をたてて身を震わせており、少女の血を吸っている様

だった。少女の顔はより一層白くなり、痛々しい。この、蛆の様な蛭の様な物体が少女に怪我を負わせたであろう事は明らかだった。

ぱち、ぱち、ぱち

そぐわない音がした方に目を向けると、赤子が歪つな肉を揺らしながら手を叩いていた。口の端は先程よりつり上がっており、少女の流した血に、喜色の笑みを浮かべている。おぞましい姿をした化け物は、無邪気に喜んでいた。

少年は反射的に少女の足に纏わりついている蛭の様なものを引き剥がそうと手を伸ばした。だが、少女自身に手で制される。少女の手にはいつのまにか何枚かの紙切れが握られており、表面に墨で何か文字や文様が描かれていた。

少女がその紙切れを足に纏わりついているものに向かって投げつけると、

ぐちゅっ

紙切れは何本かの鋭い針に姿を変え、蠢く白いモノにだけ突き刺さった。そして、湿った音と共に爆ぜる。肉片が飛び散り、甘ったるい腐臭が広がる。

少女は、すかさず二枚目の紙を取り出し、今度は未だ稚拙な拍手をしている赤子に向かって投げた。紙は同じ様に針へと姿を変え、赤子を襲う。

ぱちゅん

気の抜ける音を発し、赤子の肉が弾け、肉片と腐臭を撒き散らし

た。

鼻を突く腐臭に、少年が顔を顰める。手品か夢でも見ている様だったが、この不快な臭いは現実だった。

ふと、少年の袖が弱い力で引かれた。見ると、少女だった。失血により一層白くなった顔を痛みに歪ませながら、少年に言い聞かせる様に言う。

「……いいですか、これから私が時間を稼ぎます。右に突っ切ると倉庫がありますから、あなたはそこに隠れて下さい。そして、朝になるまで、そこに隠れてじっとしていて下さい……」

息も絶え絶え、といった様子だった。血溜まりは先程よりも広がり、傷自体は命に関わるものではないにしても、止血をしなければ少女の命を脅かすだろう。

少女の攻撃によって肉塊になった筈のものが、ぐぢゅりと音を立て再び蠢き始める。濡れた音を立て、寄り集まり、また、人の形を作ろうとざわめいていた。

少女の攻撃は、気休め程度のものだったのだろう。致命傷を与える事など出来ず、『異形』は、恐らく何度でも蘇る。少女の傷は深く、朝までは持たない。何より、その前にあの『異形』に嬲られ喰われるのが落ちだ。

それでも――自分の力が僅かなものだと知っていても、少女は出会ったばかりの少年を助ける為に、自分の命を投げ出す事を躊躇(ためら)わなかった。

沈黙する少年に、少女は青ざめた顔に精一杯の笑みを浮かべて、安心させる為の言葉を言った。

「大丈夫ですよ……。私、とっても強いんです。だから、必ずあなたを、守って見せますから……！」

下手な嘘だった。少年は、少女が自分を守る為に嘘をつき、自ら進んで死を選んだ事を悟った。そして、ぐずぐずと、もう大分もとの形へと戻っている肉塊を一瞥し――

「……分かった」

無表情に、少女の嘘に肯定の言葉を返した。

それは、遠回しに少女の命を見捨てるという宣告。

少女を犠牲にして、一人だけ生き残るという選択。

それでも、少女はその言葉に嬉しそうに微笑み、少年に早く逃げろと言おうとして口を開き――

「……え（ゞ）？」

驚きのあまり間抜けな声を出し、そのまま固まった。

少女を残して逃げる筈の少年は、少女の体を抱き上げ、更に脇に転がっていた刀を拾い、そのまま脱兎の如く駆け出していた。少年の脚は速く、桜の大木がみるみる遠ざかっていく。

「――あ、あああああなた一体何を！？　私は置いていけって言ったじゃないですか！！」

予想していなかった事態に混乱し、目を白黒させながら問い詰める少女に、少年は簡潔に告げる。

「あんた、ちょっと黙っててくんない？　うるさい」

――答えに……答えになってない……！

桜の大木は、もう見えない。自分の覚悟も、決意も、全て無駄になった事を悟り、少女は軽い目眩を覚える。せめて、失血のせいだと思いたかった。

少年と少女が立ち去った、桜の大木の下。少女の攻撃によって生まれた肉塊は、再び赤子の姿を作り蘇った。ぐちり、と形を成していない口を歪め、『異形』は笑う。

そして、体にそぐわない大きさの手足を動かし、前進する。それは歩行というよりも、這って進むと言った方が正しい。ずる、ずる、と湿った音を立てながら、歪つな赤子は前に進む。少年が走り去って行った方向へ。まだ、遊び足りないといった風に笑みを浮かべながら。

三、　犠牲と嘘と突破口

血を吸いすぎた足袋を脱がし、手拭いを細く裂いて傷口に強く巻き付ける。ぎち、と締め付けると少女は痛みに呻いたが、少年は構わずに傷の手当てを進めていく。手当て、といっても応急処置でしかない。傷口からの出血は相変わらず酷く、今も巻いたばかりの手拭いに染みを作っていく。止血のつもりで膝の下を強く縛りっているが、とても朝まで保たないだろう。化け物に殺される危険性は無くなったが、危ない事には変わりは無い。

少女の手当てを終えると、少年はどうしたものかという風に血に塗れた手で頭を掻いた。

少年が頭に巻いていた手拭いは、少女の足に巻く包帯代わりになった。衛生的に問題がありそうだが、背に腹は代えられない。一応少女にも了解を取ったので、文句を言われる事は無いだろうと少年は考えていた。

少年の髪の毛は全体的に短く切られていたが、顔の左側に垂らされた髪だけが他より長い、という変わった髪型をしていた。髪の房がツンツンと跳ねており、間違っても相手に几帳面という印象は与えない。何より他と違うのは、少年の髪の色が、手にこびり付いている血と同じく、深い赤色をしているという事だった。

赤い髪に、緑の瞳。少年の姿は明らかに異端だった。

少し躊躇(ためら)う様な手付きで手拭いを外した少年の髪の色が露わになった時、少女はほんの少しだけ驚いた表情を浮かべたが、それきり何も言わずに大人しく少年の手当てを受けていた。終始、何か言いたそうな顔をしてはいたが。

ここは、先程少女が少年に逃げろと行っていた倉の中だった。小さく、物は殆ど無かったが、隅に幾つか積んであった木箱の上に少女は座らされていた。少年の方は、地べたに胡座をかいて座っている。

失血による消耗は大きく、傷は痛みと共に熱を持ち始めていたが、少年の手当てが気休めとなったのか、少女は先刻よりは落ち着いていた。

――それにしても、この人は何者なのでしょう……。

少女は、目の前の少年に向かって視線を向けた。

巻き込まれただけの一般人にしか見えないが、あの『異形』を見ても、動揺は見せたが取り乱したり、叫び出す事もしなかった。それに、一度は了解した癖に少女を犠牲にして生き延びる事を良しとせず、少女を抱え上げてここまで連れて来た。木箱に座らされた時に何故そうしたのか話すのかとも思ったが、結局何も言わずに黙々と少女の傷の手当てを始めた。一度、少女に言われて彼女の持っていた札(ふだ)を倉庫の扉に張る様頼んだ時に「分かった」と手短に返事をしたが、それ以降はずっと黙ったままだ。

真意の分かりにくい――奇妙な少年だった。

沈黙が降りる。手当てを終えた少年は、そのまま何も言葉を発さ

ない。
　このままこうしていてもしょうがない。少女は少し躊躇(ためら)いながらも少年に話しかけた。

「あの、あなたは」
「長政」
「え？」
「俺の名前だよ。長政っていう。あんたは？」

　出鼻を挫かれ戸惑っていた少女は、長政と名乗った少年が自分の名前を聞いている事に気付き、おずおずと名乗る。

「静……傘松静(かさまつしずか)、です」
「静殿、ね」

　綺麗な名前だな、と長政は感情の籠らない声で呟く。静は怪訝な表情を浮かべながらも、先程うやむやになってしまった言葉を紡ぐ。

「あなたに、聞きたい事が」
「だから、長政だって」
「……失礼しました。長政さんに、聞きたい事があります。質問してよろしいでしょうか」
「いいよー」
「有難うございます」

　静は、律儀に頭を下げて礼を言う。静という少女は、真面目ではあるが、その真面目さは世間の方向からは少しずれている様だった。
　顔を上げた静は、唇を引き結んで、真剣そのものといった表情で長政の顔を真っ直ぐに見つめた。緑の瞳と、相対する。

「長政さんは、さっき私が『時間を稼ぐから、その間に一人で逃げろ』と言ったら、『分かった』と頷いてくれましたよね？　なのに、何故考えを変えて私をここまで連れてきたのですか……？」

静の問いに長政は一瞬黙り込み、

「ああ！そういえばそんな事言ったね、俺」

まさに今思い出したといった風に手を打った。

「そう……いえば……？」

「あ、もしかして静殿あれ信じちゃった？　ゴメンゴメン、あれ、嘘だから」

「う、嘘……」

失血のものではない脱力感が、静を襲う。全く悪びれず自らの嘘を告白した長政は、更に静に追い打ちをかける。

「だってあんたあそこにいたら絶対死ぬだろ？　説得しようにもぐずぐずしてたらあの化け物また来そうだったし、無理やり連れてって抵抗されるのも面倒くさいし。だからまあ、適当に嘘ついて油断させてから攫うのが一番楽かなーって」

「……私は、大丈夫だってあなたに言いました……！」

「でもそれ、嘘でしょ？」

「そう、ですけど……でも、私を置いていけば、少なくともあなたは助かりました！」

あっさりと言われた長政の言葉を、静は思わず肯定してしまい、それを打ち消す様に険しい目で長政を睨んで言う。けれども長政は、それを特に気にした風でも無い。

「あなたが何を考えて私を連れて来たのかは知りませんが、あの化け物からは絶対に逃げられません。……朝までここにいる事が出来れば、可能性は無い事もありませんが、私達二人が消えた以上、あれは必ず私達を探します」
「朝まで見つからない可能性は？」
「……ありません。赤ん坊の姿をしていても、あれは必ず私達に追いつきます。そういうモノなんです」
「そっか。困ったなー」

緊張感の無い長政の言葉に、静は思わず泣きそうな声で零した。
「……何で、私を置いて行ってくれなかったんですか。私が足止めしていれば、少なくともあなただけは助かったのに……！」

いけない、と思ってもつい長政を責め立てる様な口調になった。静は死ぬ事を何とも思っていない訳では無い。寧ろ、怖い。怪我をすると、痛い。血を見るのは嫌だ。「異形」と対峙すると、いつも恐怖に呑まれそうになる。それでも、誰かの命――何も知らず、巻き込まれ、弄ばれ、消えてしまう命を助ける事が出来るのなら、その為ならそんな事は幾らでも我慢できた。命を投げ出す覚悟だってしていた。

だから静は考え無しに彼女を連れ出した長政に小さい苛立ちを覚え、そんな感情を抱いてしまった自分と、長政を助けられないであろう事実に、強い絶望を覚えた。
今度あの「異形」と相対したら、怪我を負った静はとっさに長政を庇えない。かといって静の今の状況ではあの「異形」を倒す事は出来ないし、長政をこの寺の外に逃がす事も、もう出来ない。つま

りは今の静には何の対抗手段も無く、長政と一緒にただ嬲り殺されるのを脅えて待つ事しか出来ない。

誰が悪い訳でも無い。強いて言うなら、静の弱さが一番の罪だった。

もう何を言っても仕方ない事だからと、それきり黙り込んでしまった静に、長政は話しかける。

「静殿はさ、死ぬの分かってて会ったばかりの俺を助けようとしたの？」

その問いに、静は力無く頷く。返答する気力は無かった。

「命ってさ、一つしか無いんだけど、あんたそれ知ってる？」

言い様によっては馬鹿にしていると受け止められそうな言葉だったが、長政の顔にそういった表情は浮かんでいなかった。

「……知ってます。でも、私は、守りたかっただけです。あなたはただ、巻き込まれただけの、本来はこんな目にあう必要の無い人です。……私にとって、そういった人達を助ける事は、自分の命よりも大切な事なんです……きっと。だから、もしあそこで死んでいたとしても、私は後悔はしなかったでしょうし、無駄死にだとも思いません」

「ふうん」

返ってきたのは否定とも肯定とも取れない言葉。その言葉に、普段は沈んでいる静の中の利己的な感情が僅かに浮かび上がってきた。言葉も、厳しいものとなる。

「もしあなたが私を助けたと思っているのなら、それは……間違いです。何も知らないあなたでは『アレ』から逃げる事は出来ません

し、いつ『アレ』が追い付いてくるかもわかりません。あなたを庇う事も難しいですし……結局、あなたのやった事は朝になったら死体になっている人数を悪戯に増やしただけです」

最低だと、静は思う。こんな時こそ希望を捨てずに、どうやったら少年を助けられるか頭を働かせなければいけない筈なのに、出来ているのはただの八つ当たり。無意味に不安を煽る様な事しか言えなかった。

「私は、あの時、あの瞬間だけなら、あなたの命を助ける事が出来ました……。今の私にはもう、あなたを助ける事が出来ません……！」

口では長政を責めながらも、心中で静は深い自己嫌悪に苛まれていた。

誰かを助ける為なら、己の命すらも惜しくはないと思っていた自分は、ただの幻だったのだろうか。それはただの願望で、本当の自分の姿というのは、周りの誰もが陰で囁く様に欺瞞と虚栄と偽善でしかなかったのか。

どうしようもなく弱く醜い自分に、静は吐き気を覚える。

静が自分の感情に呑まれそうになっていると、空気を読まずに長政が問いかける。

「ねえ、静殿ってさ、『死ぬのは怖くない』って思ってる人？」

「……え」

「俺を守って死ぬ事に後悔しないって言っただろ？　じゃあさ、後悔はしないとしても、死ぬ事自体はどう思ってるのかなーって。あんたは、他人の為なら死ぬ事すら怖くないって人？」

予想もしなかった言葉に、静は戸惑う。

――誰かの為に、躊躇(ためら)いなく自分の身を犠牲にする。そこにあるのは、死への恐怖でも痛みでも無く、自分の行いへの誇り。それは、静がなりたかった者の事だ。そして、静が絶対になる事の出来ない者の事だ。長政の問いを「そうだ」と肯定して、最後に自分を偽りで美しく飾る事も出来る。けれど、静はそれをしなかった。

「……怖くない訳、ありませんよ」

「……」

「死ぬのは嫌ですし、今だって足が痛くて、泣きそうです。本当は……本当は、血を見るのも、あんな化け物を見るのも、嫌なんです……！」

他人には知られたくなかった、本心。初めて口に出してみて、自分の見苦しさを目の当たりにする。自己嫌悪に沈む静の耳に、長政のああ、という溜息の様な声が聞こえた。

軽蔑されたか、失望されたか。そんな中途半端な心づもりで、あんな綺麗事を言っていたのかと、罵倒されるか。それはどれも当然の反応であり、自分はそう言われて当然の卑しい人間だと、静は考えていた。

――だから、続く長政の言葉に、反応が遅れた。

「なんだ、良かった」

「……は？」

聞き間違いかと顔を上げると、長政は何を考えているのか、薄く笑っていた。

「あんたがもし『死ぬのは怖くない』って人間ならまあ、俺を庇って死んでも、周りの人は悲しむだろうけど、その人達も心の何処かで覚悟してたと思うから、俺は別に何とも思わない。あんたとして

も満足だろうしね。ただ、静殿が『死ぬのは怖い』っていうんなら話は別だよ。死ぬのが怖いんだったら、死ぬ気で生きなきゃ。あんたが死んだら、きっと覚悟もしてないあんたの周りの人達は、凄く悲しむと思うよ？　悲しんでる人を見ると、俺も凄く悲しくなるし、死んだあんたも自分のせいで親しい人達が悲しんでたら泣きたくなるだろ？　それって、誰も得しないと思う。それに、人を犠牲にして生き延びても俺は嬉しくないし、目の前で傷ついてる人がいたら、俺はとにかくその人を助けたいって思う」

笑みを浮かべながら、長政は世間話でもするかの様に言う。静は、回らない頭で長政の言葉を咀嚼し、躊躇（ためら）いながらも聞く。

「……つまり、あなたは私の周りの人達が、私の死で悲しんで、それがあなたも悲しいから、そうさせない為に私を助けようとした、という事ですか……？」

「いや、違うけど？」

なぜそう考えたのか分からない、という風に長政は首を傾げて否定する。

「あ、そうそう、今言った事半分位嘘だから」

「……具体的に、どの辺りが嘘なのですか」

「えーっと、『悲しんでる人を見ると、俺も悲しくなる』『人を犠牲にして生き延びても嬉しくない』『傷ついてる人がいたら、とにかく助けたいと思う』……辺りかな？」

「……そんな嘘を付く事に、何か意味があるのですか」

「無いよ？」

あっさりと、長政は答える。その軽い声に、静は軽い眩暈を覚えた。

先程から薄々感じていたが、この少年とは、正常な会話が成立しない。一見問題なく会話している様でも、微妙に歯車が噛み合っていない。意味の無い嘘を織り交ぜ、真意や感情といったものに辿り着かせないようにしている。故意的なのか、無意識なのかは分からない。これでは、静を「助けた」事もどういった考えで行ったのか分かったものではない。

微妙な表情を浮かべる静を前に、長政は言葉を続ける。それが彼にとっての嘘か本当かは、言わないまま。

「まあさ、誰かの為に自分の命を投げ出すって事が出来るっていうのは、凄いよ。俺が台無しにしちゃったけど、それをしようとした静殿は俺よりずっとずっと凄い人だと思う。普通に、死にたくないって思ってるのに、だ。そこにどんな思いがあろうと、ね。――でもさ、違うんだよなあ……。あんたみたいな人は、俺みたいな通りすがりの屑を助ける為に死んじゃいけないんだよ。一つしかない命を使うんだったら、せめて今まで育ててくれた両親とか、無二の大親友とか、運命の恋人とか、あんたにとってそれだけの価値のある人の為に使いなよ。……死ぬのが怖いなら、尚更だ。そうだったら、俺は止めないよ」

そう言って、目を細めて長政は笑った。

さらりと言われた、自分を卑下する言葉と、静を認める言葉。真偽は分からない。だが、静は何となくこの言葉は長政の本心なのではないか、と思った。根拠は無い。褒められて、都合の良い解釈をしているだけかも知れない。それでも、静は先程まで自分に張り付いていた自己嫌悪と無力感が、さらさらと剥がれていくのを感じた。

「長政さんは、私の事……軽蔑しないんですか。あんなに偉そうな事を言っておいて、死を恐れる私を、みっともないとか、思わない

んですか……？」
「なんで？」
首を傾げる長政。その顔には、素直な疑問。
「死にたくないって思うのは、当たり前の事でしょ。あんたがそれを気に病むのは、おかしいよ」
違う、そういう事じゃない。　でも、そうなのだろうか。そう思って、いいのだろうか。
静の心情の変化に気付いているのかいないのか、長政は、更に言葉を紡ぐ。
「……で、俺があんたを連れて来たのは、あんた一人じゃ『アレ』を倒す事が出来ないんなら、『アレ』がどういう奴なのか教えて貰って、二人で協力すれば助かるかもって思ったからなんだけど……静殿の話聞いてると結構難しそうだね、それ」
「長政さん、さっきの私の話ちゃんと聞いてましたか？……無理だって、言いました」
「聞いてたけど？　でもさ、三人寄れば文殊の知恵って言うでしょ？」
「一人足りません」
「静殿、人生臨機応変に生きなきゃ損するよ？」
長政の言う事は、滅茶苦茶だ。楽観的で希望を持っているかの様な言葉だが、長政自身がそれを信じているのかというとかなり疑わしい。
それでも、静は口許に僅かだが笑みを浮かべる。悲観的な状況であるのは変わらないが、この少年の言葉を聞いていると、このままでは終わらなそうな気がした。それが嘘か、真かは、分からないけ

れど。
静の笑みを知ってか知らずか、長政は勢い良く立ち上がり、静に顔を近づけ、言う。

「そういう訳でさ、俺にあの『化け物』の事について、教えてくれない？」

間近に見た緑の瞳からは、相変わらず感情を読み取る事は出来なかった。

四、イツワリの「怪談」

昔、この寺の近くに住んでいた女は貧しく、その日暮らしで生活するのもやっとという生活をしていたが、幸せに満ちていた。女には、恋仲の男がいた。男は良い家の出身の学生で、周囲の者は皆「遊ばれているだけだ」と噂していた。だが、女は心底男に惚れており、そういった言葉は無視していた。

ある日、女は自分が孕んでいる事を知る。恋人の男の子供である事は間違いなく、女は喜び勇んで男にこれを伝え、これを機会に夫婦になろう、と言った。だが、前々から女に飽きていた男は冗談じゃないと拒絶し、幾らかの金を置いたきり、女の許から去っていった。女は憤慨し、男に言われた様に堕胎する事などせず、男に付き纏う様になった。執拗なそれに男は次第に憔悴していき、このままでは自分の人生が駄目になると、女を殺す事を決意した。

男は付き合っていた頃によく逢引に使っていたこの廃寺に女を呼び出し、持っていた鈍器で殴り殺した。とうとう男と夫婦になれる、とめかしこんで来た女の精一杯の化粧も、着物も、血と肉に潰されて元の姿が分からなくなった。男は死体を桜の木の下に埋め、逃げ去った。

それから数日後、男は自宅で自分の腹を裂いて死んでいるのが見つかり、死体の側には直筆の文書が残されていた。そこには自分が女を殺したという事と、震える字で「赤ん坊が来る」と書かれていた。文書の中には死体の隠し場所も書いてあり、警察は桜の木の根元から女の死体を掘り返した。

それからまもなくして、この廃寺に女の幽霊が出る、と噂される

様になった。

曰く、夜にこの寺の側を通ると、赤子と、それと遊んでいる母親の様な声が聞こえる。

曰く、女の埋められた桜の木は本当はもう枯れているのに、季節を問わず満開に咲いている。

曰く、男が女を殺したという月の出た夜に寺の敷地内に入ると、出来損ないの赤子を抱いた血塗れの女と会う。

曰く、その赤子と母親と出会うと、三日以内に自ら腹を裂いて死ぬ。

曰く、稀に赤子だけと会う場合もあるが、その時は血塗れになるまで玩具にされ、嬲り殺される。

真偽は分からず、無責任な噂と言えばそれまでだった。けれども、この「怪談」は人から人へ伝わり、じわりと広がっていった。その事に、どんな意味があるかも知らずに――

静が語った内容は作り物か演劇か、という程突拍子の無いものだった。

「ケガレ」に「百奇（ひゃっき）」に「怪談」。それらに対抗する讀師（よみし）という存在。そして、静がその讀師（よみし）であり、この寺の「怪談」を駆逐する為

に夕方からこの寺に張り込んでいた事。先程静が化け物に使った不思議な技は讀師(よみし)が「百奇(ひゃっき)」と戦う為に作り出した術の様なものであり、讀師(よみし)は誰でもその術を使える事が出来る事。攻撃する以外にも札を張り付けて防護壁の様なものを作る事も出来るらしく、長政が静かに言われて張った札のお蔭で、今この倉庫に居る二人の存在をあの化け物――「百奇(ひゃっき)」に悟らせない役割をしているらしい。ただ、術者の体力と精神力によって持続時間が決まるらしく、怪我を負った静の力では朝まではとても持たないとの事だった。

そして、現在長政と静が閉じ込められている、結界について。

――人から人へと、伝えられ、広まっていく「怪談」。

それらは「宿主」の産んだ「百奇(ひゃっき)」の起こす怪異を中心として伝えられるが、もう一つ、結界の発動条件を伝える、という役割も持っている。

「宿主」も「百奇(ひゃっき)」も、人を餌として喰らう程の異質な力を持っているが、その力は酷く限定的なものでしかない。

だから、それらは自らが起こす怪異を元にした条件で発動する、結界を作り出す。

それらは自分を守る結界の中に身を隠し、自分達が一番力を行使出来る結界に人を誘い込む。

条件は「怪談」の中に潜み、人々に伝わっていく。その条件は「怪談」によって違い、場所や物、服飾品や言葉、行動、人間関係など、様々な形をしている。

無意識でも、意識的であっても、その条件を満たしてしまうと、そこには結界が出現し、人を閉じ込める。現れた「宿主」と「百奇(ひゃっき)」が食事を終えるか、条件の一つが何らかの手段で取り除かれるまでは結界は決して破れない。

大抵食事の後には凄惨な死体か、人が消えたという事実が残るだけであり、それはそのまま「怪談」の信憑性を高める為の糧となる。被害者を出した「怪談」は、恐怖と畏れ、僅かな好奇心によって、加速して人々の間へと広まっていく。そして、その中に潜んだ条件を知る者が増える事によって結界は出現しやすくなり、相対的に被害者を増やしていく。

讀師(よみし)はわざとその条件を満たし、結界に踏み入って「怪談」と相対する。更に、条件から結界の規模を予測し、詠師が結界の中で「宿主」を探し、「怪談」を倒すまでの間に、何も知らない者が新たに結界の中へと誘い込まれる事を防ぐ為に、その上に詠師が別の結界を被せる必要がある、と静は言った。条件の一つに場所や建物が含まれている場合に使われ、詠師による結界が発動している間はその場所や建物は人に感知されず、条件になる要因を取り除く事が出来るという。

静は夕方にこの廃寺に来た際に寺全体に自分の結界を張っており、この寺は常人には存在が感知される事、ましてや入り込む事など出来る筈が無いそうだ。同じ讀師(よみし)であれば静の結界を破り、侵入する事が出来る為、静は最初に長政を見た時に自分の仲間だと思ったという。

どうやってこの寺を見つけたのですか、という静の問いに長政は太った三毛猫の後ろを着いてきた、と素直に答えた。ただで泊まれる宿を探していた、と言った長政の言葉に静は不思議そうに首を傾げたが、『外』から来て、金が無いと言うと納得した顔になった。生活する金はスリや盗みなどの所謂後ろ暗い事で稼ぐつもりだった事は、とりあえず言わないでおいた。

静は長政が「太った三毛猫」という言葉を発した時に少しだけ考え込む様な素振りを見せた。長政はそれに気づいたが、追及はしなかった。今の状況を考えるとそんな事を気にしている場合ではない。
静が語ったこの寺の「怪談」はありがちで陳腐なものだったが、実際に化け物に出会った身からすれば到底笑い飛ばす事など出来ない。そして長政達は今、その「百奇（ひゃっき）」という化け物に嬲り殺されるかどうかの瀬戸際だった。

静が言うには、この「怪談」の結界の条件は恐らく「月の出ている夜」に「寺の敷地内」に「入る」事だそうだ。この条件を満たしている以上、長政達が死ぬか、「宿主」を見つけ出して潰すか。どちらかでしかこの結界は消えないらしい。条件の一つである「夜」は、朝まで見つかる事が無ければ条件から取り除かれ、結界を消す事が出来る。だが、静自身が言った様に彼女が倉庫に張った結界は長い時間は持たない。長く見積もって、後一時間足らず、といった所だった。

「――つまり、俺達はあの『百奇（ひゃっき）』だとか言う化け物に喰われるのを待つ餌な訳だ」
「そういう事です」
「いやあ、参ったなあ」

言葉とそぐわない笑顔を浮かべながら、長政は伸びをした。
長政は静の横の木箱に座っていた。背の低い静に合わせて背を丸めて話を聞いていたものだから、背骨が軋んだ音を立てる。状況を説明してもなお緊迫感の無い長政に、静は不思議そうに問いかけた。
「長政さんは……どうしてそんなに楽観的でいられるのですか？」

言ってから、皮肉に取られるかもしれない事に気付き、静は僅かに後悔する。しかし長政は静の心配など露知らず、呑気な声で言った。

「俺、そんなに楽観的に見える？」

「はい、とても」

「……そんな真剣な顔で即答しなくてもいいじゃん」

不意に長政は静の頭に掌を置き、子供を宥める様にぽん、と優しく叩いた。その行動に驚いた静が顔を上げると、長政は笑っていた。

「静殿の話だと、別にあの『百奇（ひゃっき）』は死なない怪物って訳じゃあないんだろ？　その『宿主』を探し出して消せば俺達は助かる訳だし、そう絶望的な状況だとも思えないんだよなあ。今もあんたの結界が後一時間は持つって言うし、それだけあれば何か手段の一つや二つは考えられるんじゃない。可能性がある内に諦めるのは自殺みたいなモンだと思うけどね」

そう言って、長政は笑う。その笑顔には、推し量れる感情が無かった。喜んでいるのか、楽しんでいるのか。静を励まそうとしているのか、その実嘲笑っているのか。口に出した言葉は、思いは、嘘か、真か。それらのものが全てすっぽりと抜け落ち、ただ形骸化した笑みを、長政は浮かべている。その笑顔は、見る者によってはとても不気味なものだった。だが、静は不思議とその笑顔に嫌悪感を抱く事は無かった。彼女は、理解する。この長政という少年は意図してこんな笑顔を作っている訳では無く、こんな風にしか笑えないのだと。それに特に感想を抱く事も無く、静は長政に頭を撫でられながらぽつりと呟いた。

「長政さんは、変な人なのですね」

「……静殿は結構酷い事言うよね」

渋い顔をした長政の言葉を無視し、「でも」と静は続ける。

「あなたの言った事は、正しいと思います」

まだ頭に乗っている長政の掌を手に取り、両手で握る。長政の掌は大きく、静の小さい手では覆いきれない。深緑の瞳を真っ直ぐ見つめ、言葉を紡ぐ。

「あなたが今言った事が、真っ赤な嘘だろうと、私達は、諦めるべきではありません。……必ず一緒に、ここから出ましょう」

そう言って、静は微笑んだ。それを見て長政は、また笑顔を浮かべる。それは先程の様な感情が削げ落ちたものではなく――まるで、悪戯好きな猫がにやりと笑っているかの様だった。

方法を考える、とは言っても、実質二人に出来る事は極端に少ない。その中で一番可能性が高いものが、「『宿主』の正体と居場所を探り当て、何らかの方法で破壊する」というものだった。それは単純にして確実な方法だったが、危険性は高い。長政は今さっき「百奇（ひゃっき）」の存在を知ったばかりで、まともな戦力にはならない。静もまた、脚の怪我で術を多用する事も、満足に戦う事も出来ない。それでも、一つの可能性に縋る。残された時間も少ない。

まずは、この「怪談」の「宿主」を探り当てる事。全ては、それからだった。

「この『怪談』での被害者は、今の所四人確認されています」
静が、涼やかな声で告げる。すらすらと澱みない口調で、頭の中に叩き込んだ情報を長政へと伝える。指を四本立て、言葉と共に一本一本折り曲げていく。

「一人目は、この近辺に住む大学生。自宅でお腹を裂かれて死んでいるのを発見されました。二人目と三人目は、この『怪談』を知り、肝試しにここに訪れた若い男性。揃って周囲の友人に『女に会った』と打ち明けていたそうです。一人目と同じく、お腹を裂かれた死体を発見されました。四人目は……長政さんと同じ、『外』から上京して来た若い女性です。二日前に、この寺で血塗れになって死んでいるのを発見されました」

四人目の犠牲者が出た所で、やっとこの寺を舞台にした「怪談」がある事を突き止め、「百奇（ひゃっき）」の可能性である事に辿り着けたという。

世に溢れる「怪談」の全てに「百奇（ひゃっき）」が宿っている訳ではなく、大半は無責任で、無害な創作か、人の中で伝わっていくにつれて、内容がすっかり変質し、結界へと誘導する役目を失ったものばかりだった。その中から、人を喰らう「怪談」を探り当てるのは難しく、大抵は誰かが喰われてから初めてそれが有害な「怪談」なのだと発覚する。

静は、心中で密かに歯噛みした。対応は後手にならざるをえず、その間に被害者は拡大する。犠牲者の中には、早めに「怪談」の存在に気づいていれば、救えた命が確実にあった。取り零したそれら

は痛みとなって、常に静を苛む。

けれども今は、感傷に浸っている場合ではない。

静は、自分の中に慢性的に湧き上がってくるそれに、無理やり蓋をした。

「えーっと、静殿が言ってたこの寺の『怪談』から考えると、一人目から三人目はその殺された女に会って、四人目は俺達みたいにあの赤ん坊の化け物と会ったって事？」

長政の声からは相変わらず緊張感も真摯さも無かったが、それが却って静の心を不思議に落ち着かせていた。

長政の推測に、静は黙って頷く。それを受け、長政は更に言葉を重ねる。

「んー、ちょっと分からない所があるんだけどさ、この『怪談』では、人を殺すのは『殺された女の幽霊』ってはっきり言ってるよね？」

顎に手を当て、長政は言う。

「なのに、その『殺された女の幽霊』は『宿主』にはならないの？」

長政の問いに、静は難しい顔をして答える。生徒の質問にどうやって説明しようか困っている教師の様な顔だった。

「いえ、『幽霊』が『宿主』だという事はあり得ません。基本的に……いえ、絶対に、この世に形のあるモノじゃないと『宿主』にならないんです」

形があるという事は、目に見えるという事。それはつまり、形のあるモノは全て、「怪談」と「百奇（ひゃっき）」の大元である「ケガレ」に寄

生される可能性を持っていて、それら一つ一つ全てに「宿主」の可能性があるという事らしい。

「この話の、『女』に関係するもので『宿主』になる可能性が高いのは女の死体位ですが、話の中で警察に掘り起こされたとなっていますし、『女』はあの赤ん坊と同じく『百奇』と同じだと考えて良いと思います。……そもそも、『宿主』自体には人に害をなす力はありませんしね」

「え？　そうなの？」

「はい。『百奇』は、力の無い『宿主』を守る、という役割も兼ねていますから。それに、『宿主』になったモノには自分が異形を産んだという自覚も意志もありません」

形あるモノ全てに「ケガレ」は宿る可能性があり、それは、物品であったり、動物であったり、「場所」という概念であったり、様々だ。それらは「宿主」になっても変わらず、ただそこに在り続ける。ただし、例外もある。「人間」が宿主となった場合は、その「人間」の精神は「ケガレ」に食い尽くされ、壊れた意志を持って「百奇」を行使しはじめる。

「今回は被害者以外にこの『怪談』に関わる人物はいませんから、恐らくこの寺の中にある何かが『宿主』となっている可能性が高いです。……それと、この『怪談』に出ている事件なのですが……」

「ん？」

静は、言葉を一旦切り、自分自身でも納得していないかの様な表情で続きを言った。

「存在、しないんです。いくら記録を探っても、この寺に死体が埋められていたという事件も、学生が自宅で腹を裂かれて死んでいたという事件も、始めから、起こっていないんです」
「……どういうこと？」

存在しない男と女にまつわる「怪談」。けれど、被害者は確かに存在し、長政達は「百奇（ひゃっき）」に追われている。腑に落ちない話だった。
長政の疑問に、静は難しい顔をしながら自分の推測を口にする。

「恐らく……『怪談』の『結界』に入る条件だけを残して、人から人へ伝わっていく内に、内容が誇張されていったんだと思います。何かしら曰（いわ）く付きの方が、噂も広まりやすいですから。……ただ、元ネタの無い完全な創作というのは珍しいのですが」

「怪談」は基本的に人から人へ、口伝えで広まる。その性質上、中継した人数が多ければ多い程、正確性は低くなり、元の姿から別のものへと変質する場合がままある。それ自体はよくある事だが、この場合「怪談」に不純物としての情報が含まれる事になり、読み解く事が困難になるのだと、静は言う。

静が言うには、「怪談」を読み解くとは、そこから読み取れる情報の断片から、「百奇（ひゃっき）」が起こす怪異、怪異の元となった穢れの内容、そして、それらに繋がる「宿主」へと通じる、一本の理屈を見つける事らしい。

今長政達が巻き込まれている「怪談」には、『埋められた女』は存在しないが、それに遭遇し、『腹を裂かれた男』はいる。『死体の埋まった桜の木』は存在しないが、「怪談」の中にある様に『狂い咲く桜』は存在する。そして、『出来損ないの赤子』は実際に長政達の前に現れ、静の脚を『血塗れ』にした。同じ様に、この寺を

訪れた若い女を『嬲り殺した』。符合する現象を繋ぎ合わせ、元凶たる「宿主」を炙(あぶ)り出す。それこそが、「怪談」に勝利する為の唯一の方法なのだという。

長政は頭を掻いた。どちらかというと頭を使う作業が苦手な長政にとって随分と無茶な要求だと思う。けれども、命には代えられない。

長政にとって、死は特別な意味を持たない。だが、目の前の死を怖がる愚かなお人好しを死なせるのは、なんとなく気が引ける。その為にも、ここは大人しく頭を働かせた方が良さそうだった。

無言でいる長政に、静は首を傾げて訪ねる。

「どうかしましたか？　何か、私の説明で至らない所でも……」

「いや、そういう訳じゃないよ。一つ聞きたいんだけど、この寺には『女の死体』は埋まってないっていったけどさ、この寺自体に、何か変わった所とかは無かったの？」

「寺自体……ですか」

「そ。住職の女癖が悪かったとか、関係者に似た境遇の奴がいたとか、生まれた赤ん坊がすぐ死んだとかさ」

「私が調べた限り、その様な記録はありませんでしたね……。住職は大分昔に老衰で亡くなったらしいので、特に不審な点もありませんし。噂は幾つかありましたが、どれも確証はありませんでした。それに、この寺の宗派では姦淫は御法度になっていましたから、この『怪談』に関係する様な事は起こらなかったと思いますよ」

「そーかなあ。坊さんとか結構変態多いよ？　そこら辺の女ひっか

けて孕ませて面倒くさくなったから捨てたとか、そういう話でもあると思ったんだけど」

「長政さん……考え方が下世話すぎます……」

静が、頬を僅かに赤面させて抗議する。長政はそれを見て謝るが、いまいち反省の意志が感じられない。静はそんな長政を暫し睨んでいたが、やがて切り替えた様に言う。

「まあ、それはともかく、長政さんの見解は意外に核心を突いているかもしれません。『怪談』の舞台がこの寺という『場所』に限定していますから、この寺自体に『ケガレ』の集まる原因があった可能性は高いと思います」

「じゃあやっぱりそこら辺の女を……」

「だから、そっちの方向で考えるのは止めて下さい……！破廉恥です！」

「お茶目な冗談なのに」

「あなたの冗談は冗談に聞こえないんです！」

静殿酷ーい、と口を尖らせる長政をあえて無視し、黙って記憶を手繰る。

夕方からここにいた静と違い、長政はここにやって来てすぐ、「怪談」に巻き込まれた。長政と静が共通して遭遇したモノ。遭遇したといえば赤ん坊だが、あれは「百奇（ひゃっき）」だ。あの赤ん坊は、突然現れた。いや、違う。生まれたのだ。あの、肉色をした蕾から。「百奇（ひゃっき）」を産んだ蕾を咲かせていたのは、

「……桜？」

「……そのまんま過ぎない？」

ふざけた事を言いながらも同じ考えに至っていたのか、長政が疑問を呈した。

「桜が『宿主』でもいいけど、どうして赤ん坊を産むのさ」

「そうなんですよね……。あの桜が『宿主』の可能性は高いのですけれど、どういった『ケガレ』を宿して、『百奇』を産んだのかが、分からないんです」

通常は「怪談」に怪異に至るまでの過程が含まれているものだが、この「怪談」ではその過程が全て存在しない事件にすり替わっている。「宿主」の可能性は掴めたが、読み解くには、まだ足りない。理屈が、通じない。

「本当に死体が埋まってるとか？」

「……そうだとしたら、恐らく死体の方が『宿主』の可能性が強くなります。土に埋められた死体が『宿主』だった場合はその埋められた土に異常が起こりますから、桜の方があんな風になるのはちょっと……考えにくいです」

仮に死体が埋まり、桜が死の穢れを宿していたとしても、どういった理屈であの桜が赤ん坊を産む事になったのか、解かなければいけない。

「んー、何か足りないんだよなあ……。俺もあの桜がそうなんじゃないかって思うけどさ、何かしっくりこないよなあ」

「『百奇』の姿があの赤ん坊と……私達は遭遇していませんが、女である以上、それに関わる何かがあの桜にはある筈なのですが……」

「女……女、ねえ……。それってやっぱりあの赤ん坊の母親でいいのかな」

「多分そうだと思います。……そういえば、何故女に会う場合と、

赤ん坊に会う場合に別れているのでしょうか？」

ふと口を突いた静の疑問に、長政は眉を顰(ひそ)めた。

「あー、そういえば、女に会った時と赤ん坊に会った時で、殺され方が二種類あるんだっけ」

「一人目から三人目は、全員『女』に会って、四人目と私達は『赤ん坊』に会ってます。……偶然、では無さそうですね」

「何か法則でもあるとか？」

「そうですね……ここに来る前に立てた仮説ですが、ここに入った者が男性なら『女』に、女性だったら『赤ん坊』に分けられているんじゃないかと」

「男と女で違うって事？」

「『女』に会った被害者達は、みんな『怪談』に出て来る『女』を捨てた男と、年や境遇が似ていました。だから、そういった場合は『女』が出てきて、殺すんだと思います。女性の場合に『赤ん坊』が出て来るのは……多分、死んだ女のお腹に入っていた子供からだと、母親に見えるのではないかと、考えたのですが……」

けれどこの仮説は、元になる事件が存在しないと発覚したので、可能性から消えた。

繋がっているようで、一致しない。手探りで底なし沼を浚っている様だった。見当違いの方向へ歩かされているのではないかと、不安が募る。もう、時間も本当に少ない。

焦燥感に煽られている静の横で、長政は考え込んでいた。眉を顰めたままで、僅かに困惑の色が滲んでいる。

「長政さん、どうかしましたか？」

「ん？　ああ、俺は男なのに『女』に会わなかったのはなんでかな

ーって考えてて」
「それでしたら、長政さんはこの『結界』の闖入者の様なものですし……。それに、私の仮説は多分間違っているので、それを基準に考えない方がいいと思いますよ」

「んー、そうかなあ。男と女で会うものが違うっていうのは結構当たってると思うんだけど」
長政は眉を顰め、顎に手を当てて考え込む。掴み所が無く得体の知れない印象の拭えない長政だが、その姿は、まるで謎々に挑む子供の様だった。それを見て、静は心中でこっそり笑む。そんな場合ではないが、少し、長政に対して親近感を抱いた。静は何か、長政に言葉を掛けようと口を開き、

「この『怪談』で出会うのが赤ん坊と女ならさ……じゃあ、あの木の上にいた女の子は何だったんだろうね」

……そのまま、凍りついた。
――なんですか、それ。
言葉が、口から出ない。
絶句している静に気付かず、長政は尚も話を続ける。彼にだけ見えた、世界の話を。

「あの桜の木さー、木の又の所に小っちゃい女の子座ってたよね？
それで、赤ん坊を出して……産んだって言った方がいいのかな、あの肉っぽい丸いのが周りに一杯生えてて、それもなんか腐った様な色してて結構気持ち悪――」

長政の言葉は、そこで途切れた。静が、一際険しい顔で長政を見

ているのに気付いたからだった。顔に浮かんでいるのは、困惑と驚愕。

「静、殿……？」

呼びかけると、静は大げさに華奢な肩を震わせた。戸惑いを色濃く顔に浮かばせたまま、半開きになったまま凍っていた口を動かし、言葉を絞り出す。

「……いませんでした」

「え？」

「木の上には、誰もいませんでしたし、あの『蕾』も、一つしか木に生っていませんでした。……私の見た限りでは」

強ばった声で静は言う。長政はまだ状況を把握できていない様な顔で、言葉を重ねた。

「え……でも、さ。いたよ？　女の子。一瞬で消えちゃったけど、あの、赤ん坊と目が合って、ぱーって目の前が白くなった時があったでしょ？　そん時、木の上に赤い着物着た女の子がいるのが見えたんだけど、見て…な、い……？」

語尾が、疑問で萎(しぼ)む。静の表情は変わらず、長政にも漸(ようや)く自分の見たものが、他の者には見えない異端であると気付いた。

「……そもそも、長政さんの言う『目の前が白くなった時』というのは、無かったんです。あの時あなたは、今にも倒れそうで……」

体をふらつかせる長政に、赤ん坊が危害を加えようとしていたから、咄嗟に静は長政を突き飛ばし、庇った。「百奇(ひゃっき)」の異形の姿に

脅えたのかと思っていたが、そうでは無かった。長政はあの時、一瞬とはいえ見えないものを見ていたのだ。「百奇（ひゃっき）」と「宿主」の、別の姿を。

長政は黙り込む。戸惑いは伝わってくるが、相変わらずそれが彼の感情の真実なのかは分からなかった。静もまた、言葉を発さない。だが、沈黙とは裏腹に、頭の中では長政の言葉を切っ掛けにして、情報の断片達が、目まぐるしく組み上がっていった。

――赤い着物の少女。

――この寺に囁かれた、二つの噂。

――遭遇する「女」と、「赤ん坊」。

――桜の木に生る、肉で出来た蕾。

――宿っているのは、出来損ないの赤ん坊。生まれ損なった、いや、生まれる事を望まれなかった赤ん坊たち。

――赤ん坊を宿したあの蕾は、いつか花開く為のそれでは無い。小さな命を胎内（なか）で潰す為の……子宮だ。

欠片たちは繋がり、嵌め込まれ、あるべき形へと戻っていく。

闇雲に探っていた手が、一つのものを掴んだ。

「静殿大丈夫？」

ずっと俯いて黙り込んでいる静を覗きこみ、長政は心配するような声を掛ける。静はその言葉には答えず、一つ、呟いた。

「繋がった……」

「え？」
脈絡の無い言葉に思わず聞き返した長政の顔を見上げ、静は言う。
その言葉は、揺るぎ無い確信を持っていた。

「見つけました……この『怪談』の、『宿主』」

五、『馬鹿』

「なんかさ、俺の言った事簡単に信じちゃっていいの？　あんた」

「宿主」を突き止めたという静の推理を聞いた長政は、少し考えた後そう言った。

静の推理は一応の理屈は通っていたが、その根拠は、長政が見て、静が見る事が出来なかったあの光景に基づいていた。他人からの伝聞、しかも不確定な要素が非常に強いものに依存した推理が、真実を掴んでいるかは怪しい。

長政は静の推理を否定している訳では無い。ただ、自分なんかの言った事を信じて、それを頼りに行動しようとする静に、何か言いたくなっただけだった。

これが間違っていたら、確実に死ぬ。長政本人でさえ、自分の見たものが確かなものなのか分からないのに、静がそれをあっさりと受け入れているのが、長政には信じられなかった。

「でも、長政さんはその光景を実際に見たのでしょう？」

「それはそうだけど」

「それなら、何も問題は無いじゃありませんか。長政さんの見たそれが確かなら、私の考えも合ってる筈ですから」

「……だからさ、あれだけ静殿に嘘ついてた俺の言う事を、そんなに簡単に信じちゃっていいのかって話だよ。それも、俺だけ見えてあんたには見えなかったとか、あからさまに嘘くさい話」

「でも、長政さんの言った事は嘘ではないのでしょう？」

「だーかーらーさー……」

通じている様で話が通じていない。

他人に、これだけあっさり自分の言動を信じられたのは、短い人生の中で二度目だった。

このどうしようもないお人好しは、長政の言った事をあっさり信じている。長政が意味も無く嘘をつく事を知っているのにも関わらず。

それがどうしようもなく居心地が悪く、長政は静の瞳から目を逸らし、刀を手に取った。

「宿主」を潰すのは、長政の役目だった。最初は静が怪我を押してでも自分がやると譲らなかったのだが、その脚の怪我では木に登れない、という長政の説得によって渋々折れた。その代わり、静はあの赤ん坊を引き付ける囮になる事をかってでた。

静の血に染まった足を見るに、それさえも正直やって欲しくは無かったが、無防備な「宿主」を守る為の力に特化した「百奇（ひゃっき）」に対抗する術を、長政は持たない。結局、静が引き付けている間に長政が出来るだけ迅速に「宿主」を絶つ、という事で話は落ち着いた。

正直、長政が説得したという事もあるとはいえ出会ったばかりの他人に自分の命も係わる様な役目を託すという行為も長政には信じられなかった。何も考えていないのか、それとも長政を信頼しているのか。

前者であって欲しいと、刀の下げ緒を手で弄びながら思っていると、静が声を掛けた。

「長政さん、これを」

「ん？」

静の方を向くと、彼女は頭に付けていた銀色の髪飾りを外し、長政へと差し出していた。

静の髪飾りは少し変わった形状をしており、横長の板状のものが頭の形に湾曲し、その表面には精緻な花の模様が彫られている。いつ見たかは分からないが、見覚えのある模様だった。両端には赤い紐がついており、それを頭の後ろで結んでつけるのだろうと思われる。

「これがどうかした？」

「この髪飾り、術を使えない人を守る結界の力を、少しだけ持っているんです。……もしもの時にあなたの身を守ってくれると思いますから、持って行って下さい」

長政は何も言わず、その髪飾りを受け取った。

静の言う「もしもの時」とは、恐らくは宿主の討伐が失敗した時、だ。もし自分が「百奇（ひゃっき）」に殺されても、長政が生き延びる可能性を少しでも残す為に、髪飾りを渡す。

呆れる程に、愚かな行為だった。

長政はわざと挑発する様な笑みを浮かべ、静に言う。

「静殿はさ、俺みたいなのにこんなの簡単に渡しちゃっていい訳？」

「何故ですか？」

静の反応に、長政の口の端が吊り上る。

手にした髪飾りは恐らく本物の銀で出来ており、意外に重い。大切なものでもあるのだろう。手入れが行き届き、曇り一つ見せずに硬質の輝きを見せていた。表面の繊細な模様はそれだけでこの髪飾りが高価なものだという事を示している。

「身を守る力があるとか、そういう事言って、俺がこの髪飾り持って『宿主』の所にも行かないで逃げるんじゃないかとかさー、そういう事は思わないの」

「……ああ」

やっと分かったという風に、静は表情を変える。だが、その後に続いた言葉は長政を呆れさせた。

「でも、長政さんはそんな事しませんから、大丈夫です」

「……馬っ鹿じゃないの」

思わず、声に出た。作った笑みが、引き攣る。

やはり静は何も考えていないのだろうと、長政は思う。そうでなければ、こんな事を長政の様な人間に向かって言える訳が無い。

あし様に言われたというのに、静は特に怒りを見せず、言葉を続ける。

「長政さんがそんな事をする人をする人なら、きっと最初から私を連れて逃げたりはしませんよ。それに――」

言葉を切り、静は、長政を見つめた。

「私は、長政さんの事信じてますから」

そう言って、静は柔らかに微笑んだ。

耐えられない、という風に長政は目を逸らし、吐き捨てる様に言う。

「……やっぱり、あんたは馬鹿だよ」

まるで、思い通りに行かない事に拗ねる子供の様に。

「――どうしようもない、馬鹿だ」

六、　水子桜

昔、この近くに住んでいた女の子が失踪するという事件が起こった。

年の頃は、確か十歳にも満たない少女だった。

父親はおらず、母親が女手一つで育てていたという。母親は半狂乱になりながら娘を探したが、見つかる事は無かった。時が経ち、その母親もこの地を移り、少女の事を思い出す人はいなくなったと思われた。

だがある日、一つの噂が囁かれる様になる。

失踪した日に、その少女がこの寺の中に入っていくのを見た、と。その隣には、この寺の住職が立っていた、と。

いなくなった少女には寺に通う様な習慣は無く、また、住職も当時少女の事について聞かれた時「何も知らない。その子とは話した事も無い」と答えていた。

見間違いだと言う者もいたが、その日少女はお気に入りの赤い着物を着ており、遠目から見てもその少女だという事が分かった。

誰かが、一つの推測を口にする。

住職が少女を殺し、寺の何処かに死体を隠しているのではないか、と。

けれどもその推測は、そう広がる事も無くいつのまにか立ち消えた。

少女が失踪した事自体が随分昔の事であったし、その寺に世話に

なっている者達にとって、そういった不穏な噂が広まり、警察などが出張って来るのは避けたい事だった。
噂は、「あの女の子は桜に喰われた」と、形を変えて残っていたが、やはり時と共にそれを語る者もいなくなった。

その内住職もこの世を去り、後継ぎのいなかった寺は廃寺となった。この寺で、昔何があったのか。真実を知る者は、全ていなくなった。残ったのは、変わらず咲き続ける桜の木だけだった。

「――来ましたね」

倉庫の外、静は木の壁に体を凭れかけて立っていた。右脚に巻かれた長政の手拭いはもう、すっかり赤く染まっている。本当はちゃんと立ちたかったのだが、血を失いすぎた脚は、まともに動かない。左脚一本で体重を支えるのも、かなり無理をしているのだ。

静が少し離れた地面を睨みつけると、ぐちゅ、と泡立つように、芽吹くように、地面からぐじゅぐじゅと崩れた肉塊が湧き出てきた。
じゅぶ、と濡れたものが纏わり付き合う、不快な音。それが、何かを形作る前に、静は札を針に変え、投げつけた。針が肉に突き刺さり、破裂する。飛び散った肉片は一つ一つがそれ自体意志を持っているかの様に蠢き、また何かの形を作り出そうと、寄り集まる。

最初は、この赤ん坊は殺された女が宿した「産まれなかった赤ん坊」だと思っていた。だがそれは間違いであり、実際は「産まれる事を許されなかった赤ん坊」だったのだ。

この寺の、二つ目の噂。堕胎手術の場を、提供している、と。

明治という時代になって西洋の技術を取り入れ、医療は大きく発展した。けれども、堕胎は未だ論理的に許されない事と認識されていた。もし医療的に正しい手術を受けるとしても、費用はべらぼうに高い。自然と非合法の手段を取らざるを得なくなる。

その、堕胎手術の場をこの寺は提供し、幾らかの金を取っていたという噂。

それだけでは無く、育てきれなくなった子供、堕胎せずに産んだが結局持て余した赤子を引き取り、間引いていたという噂まであった。

余りに残酷で、現実味の無い話ではあった。けれども、人の好奇心を煽るであろうその噂は、不自然な程に広がらなさすぎた。実際に、この辺りで失踪した子供が何人かいたというのに。

噂が広がる前に揉み消したのは、恐らく実際にこの寺の世話になった親達だろう。

「子殺しの寺」

ほんの短い間にこの寺に囁かれた名前は、親たちの罪悪感と、自分の罪が暴かれるのではないかという不安を煽るのには十分だった。だから、それを必死で「無かった」事にした。

親の手による間接的な子殺しという、歪み、澱み、世の理に反し

た穢れは、「ケガレ」を宿し、「百奇(ひゃっき)」を産み、「怪談」を紡いだ。

男の腹を裂くのは、自分達が胎を裂かれて取り出されたから。

女を嬲り殺すのは、自分達を捨てた母親を、憎悪しつつも愛しているから。

桜の木に生る蕾に宿っている赤子は、その命を芽吹かせる事を許されず、子宮という胚の中で潰され、腐り、死んでいく。

蕾に囲まれた少女は永遠に木の上から降りられず、母の元に帰る事は出来ない。そもそも、少女を木の上へと捨てたのは、母親だった。

じゅぐり、と一際不快な音が響き、肉で赤ん坊が形作られた。不釣り合いに大きい頭。まだ作られていない瞼。それに透ける黒い眼球。異様に小さい手足。人の形になる前に、母の胎(はら)という揺り籠から振り落とされた、水子たち。

哀れだと思う。あんまりだと思う。酷すぎると、思う。

だが、目の前にいるそれは既に「百奇(ひゃっき)」へと変質し、「怪談」となり、何の罪も無い人を喰った。

讀師(よみし)であり、無辜の人々を守るのが自分の役目だと信じている静にとって、例えどれだけの悲劇によって生まれた「怪談」であっても、人をその毒牙にかけた以上、もうそれらは駆逐し、根絶やさなければいけない存在だった。静にとって何より大切な、食い物にされる罪なき人々を守る為に。

許せないと思う心と、可哀そうだと叫ぶ感情を無理やり切り離し、静は術を奮う。

出来損ないの赤ん坊を、静の針が襲う。それらは何十本、何百本となって、銀色の雨となり赤ん坊に突き刺さった。

針の雨に穿たれた肉は、欠片を飛び散らせる間もなく地面に溶け込んだ。

広がる、血の匂いと腐臭。術を一気に使った反動と、不快なその匂いで頭が霞む。

――……ダメ、まだ、まだ……もうちょっと、時間を稼がないと……。

宿主を討伐しに行った長政に「百奇（ひゃっき）」の手が伸ばされない様に、静は今しばらくこの「百奇（ひゃっき）」を引き付けなければいけない。

正直な所、讀師（よみし）以外の者に宿主の討伐を任せるなど、前代未聞だ。長政が宿主の許に行ってくれているという保証も無い。本人の言った通り、髪飾りを奪ってどこかに身を隠しているという可能性もある。

だが、静は不思議とそうは思わなかった。

一旦「信じる」と決めた人間を疑わず、最後まで信頼する事は静の美点であり、悪癖だった。

「世間知らずのお嬢様」と揶揄され、目に入る誰も彼もを善良な人間だと「信じ」ているのだろう、と言われる静だが、静には静なりの基準がある。この世が善良な人間ばかりで出来ていない事も、

理解している。本心を少しも見せずに人を欺く事が出来る者がいる事も、知っている。そして、長政が本心を殆ど表に出さず、嘘偽りで己を固めている事を理解していて尚、静は長政を「信じ」た。

「あぐっ……！」

不意に、脇腹を鋭い痛みが襲う。目をやると、体を凭れかけていた壁に膨れた白い手が生えて、静の脇腹の肉を抉っていた。鮮烈な赤色が吹き出て、着物を汚す。咄嗟に壁を突き飛ばし、離れる。だが、脚に力が入らず、静は無様に転がった。流れ出す血が、熱い。傷口は脈打ち、その度に血をどくどくと溢れさせていた。

このままでは、「怪談」にある通りに嬲り殺されるだけだった。だが、静は、長政が「宿主」を潰し、この状況を打破してくれると、「信じ」ていた。

だから、この赤ん坊を、長政の許へと行かせる訳にはいかなかった。静は、袖からありったけの札を取り出す。

ここから無事に出れたなら、長政と、色々と話したい事があった。『外』から来たという、恐らくは寄る辺の無い長政の、居場所を作ってやりたい。嘘で凝り固まった中から、時折垣間見える本心を、もっと見たい。

長政がそれを素直に受け入れてくれるかは分からない。そもそも、この状況が終わってもまた会えるかどうかも分からない。

それでも、静は長政が戻ってくる事を強く「信じ」た。その為にも、自分が死ぬ訳にはいかない。死ぬのは、怖い。とてつもなく、怖い。誰にも言う事が出来なかったその恐れを、長政は責めなかった。それだけで、十分だった。

「なんだか、今から死にそうな人みたいな心境ですね、私」

冗談めかして、静は言う。力の入らない体を叱咤し、上半身をやっとの思いで起こす。眼前の赤ん坊は、不完全な形で笑っていた。それはまるで、人形の手足を戯れに？ぐ幼子の無邪気。

「……お生憎。貴方の玩具になるつもりは、ありませんから」

言葉と共に、札を投げる。針は太さと速さを増し、礫の様に「百奇」を襲う。

ぶちゅ、ぐちゅ、と潰れる音、飛び散る肉片。そして、肉片から身体の一部が生え、静をどうにかして嬲り殺そうと、にじり寄って来ていた。

悪夢の様な、光景だったが、静はそれを恐ろしいとは思わなかった。

――来るなら、来い。

負った怪我と、追い詰められていくこの状況。どちらにもそぐわない不敵な笑みを浮かべ、静は次の札を取り出した。

「……げっ」

角を曲がり、広がる光景を目にした瞬間、長政はあからさまに嫌そうな声を上げた。

静の話では、「百奇（ひゃっき）」は長政達が見た一体だけで、その一体を引き付けておけばその間「宿主」は無防備になるだろう、となっていた。

しかし、桜の木に生るあの「蕾」は何個かが破れ、地面にその中身をぶちまけていた。半分溶けているかのような、形を成さない肉は、ぐじゅりぐじゅりと耳障りな音を立てて戦慄（わなな）いている。だが、木の根元で蠢く肉達は、形を成してはいなかった。

指や目、歯などの部品は蠢く肉の合間からちらりと見えているのだが、それらがはっきりと人の形を作る事は無い。ただ、音を立ててざわめいているだけだった。

怪訝に思いながらも、桜の方へと歩を進める。じゃり、と、草鞋が地面を踏む音を出す度に、肉達はぶるりとその身を震わせた。

やはり、蠢くばかりでこちらに危害は与えて来ない。地面と同化している肉達は、長政が横を通り過ぎると肉の合間から異様に大きい眼球でねめつけてきたが、ただそれだけだった。それどころか、長政が近づくと、一際大きく身を震わせ、一瞬の後にどろりと溶けた。地面と同化したそれは、猛烈な腐臭を漂わせる。長政はその臭いを気に留めず、桜の方へと向かうのを止めなかった。こちらへ攻撃してこない理屈は分からないが、助かった。自然と、早足になる。ぐずぐずしていたら静の負担が増える。本人は強がっていたが、あの脚では立っている事も辛い筈だ。

さっさと「宿主」でもなんでも倒して、静を医者に見せなければいけない。

他人を庇って怪我をして。死ぬのが怖いくせに強がって。あまつさえ、他人を信頼して自分の命に係わる事を笑顔で預けた。

「馬鹿だよなあ」

聞く者のいない、長政の呟き。歩みは、止めない。

「俺みたいなの簡単に信じちゃって、ホント馬鹿だよね、あの子」

足が、止まる。桜の木の根元に、到着していた。木の付近で蠢いていた、人未満の肉達は、長政が近づいた事で跡形も無く溶けていた。

「俺の言った事は全部嘘だって言ったら、あの子どんな顔するかなあ」

そう言いながら、長政は上を見上げた。鮮やかに咲く花々と、それらに混じって咲く、赤ん坊を閉じ込めている肉の蕾。それらの奥に、白い手が力無く垂れ下がっているのが見えた。

「……ま、それも嘘なんだけどね」

ふう、と溜息を吐き、長政は刀を手に持ったまま木の幹を登り始めた。随分と登りにくそうなやり方だったが、長政はすいすいと登っていった。

ぼこぼことした木の瘤を足場にし、登る。幹から枝へと分岐する場所まで、登り、手を掛ける。そのまま、腕の力で一気に体を上に持ち上げた。

「……みーつけた」

大木の幹の、一番太い枝。その根元には大きい洞(うろ)があり、少女はそこに収まっていた。
十三、四程の、まだ幼さの残る顔立ち。目は閉じられており、顔だけを見ればまるで眠っている様だった。肌は、紙の様に白く生気を感じさせない。

少女は、何も身に付けてはいなかった。四肢をだらりと力なく伸ばし、裸身を晒している。肉の付き始めてきた手足に、膨らみかけの乳房。淡い桜色の先端。そしてその下の、一旦引き裂いてから、内側から無理やり繋ぎ合わせた様な傷を持つ、大きく膨れた下腹部。

少女は、孕んでいた。
恐らくは、この「怪談」を。

よく見れば少女の体には細い枝や葉が絡み合い、この桜と一体化しているようだった。
この少女こそが、「ケガレ」を宿し、「百奇(ひゃっき)」を産み出し、「怪談」を紡ぎ出した、「宿主」なのだろう。

長政は、少女の顔をまじまじと見つめる。目を閉じ、年が幾らか違う所を除けば、長政があの白い視界の中で見た少女の顔に間違いは無かった。ただ、長政が見た少女は十歳位の年頃で、赤い着物を着ていた。その差異が気にならない訳ではないが、今はそんな場合では無い。

長政は、手にした刀の鞘から、刀身をすらりと引き抜いた。鞘を体の脇の比較的太めの枝に引っ掛け、刀を両手で構える。一拍おいた後に、銀色の輝きを放つそれを、躊躇(ためら)いなく少女の白い喉に突き刺した。

さくり、とまるで雪に突き立てでもした様に抵抗なく刀が刺さった。人の形をした物に突き刺しているのが嘘の様に、手応えが無い。そのまま、刀身を下へと下していく。すう、と刃が進む。喉から、鎖骨、胸元を通り、膨れた腹へと、

ごりっ

――刃が、止まる。抵抗なく進んでいた刃の進行を、何かが阻んだ。

長政は、それに特に反応を見せなかった。刀を握る手に力を込めて、更に下へ下へと刃を進めて行く。突き立て、切り裂いていく刀身から長政の手に伝わる、人の肉を、神経を、血管を、筋を、骨を、侵し、蹂躙し、破壊していく感触。先程までの豆腐を切っているかの様な呆気なさとは違う、圧倒的なそれは、長政にとって初めてのものではなかった。

どす黒い血が噴き出す音を立て、木の洞(うろ)に血だまりを作る。少女の白い顔を、飛び散った血が汚した。腹の中程まで開かれているというのに、少女は無反応だった。

長政は一層力を込めて、刃を少女の下腹の方へと滑らせる。すると、胎(はら)の中に潜んでいた何かが、肉を切り裂き、蹂躙していた刃を掴み、止めた。

「……」

まだ肉を裂かれていない少女の胎(はら)の部分が、ごろりと胎動した。胎(はら)に宿るそれは、長政の突き立てた刃を掴んだまま、その軌跡を辿り、身を起こす。

……ぬちゃっ

少女の体に刻まれた、赤く、昏(くら)い亀裂。その奥から、黒い血の糸を引いて白い腕が姿を現した。

柔らかい肉に包まれた、小さな白い腕。それは刃を掴み、押し留める。長政が指が白くなる程に力を込めて斬ろうとしても、進む事を許してはくれなかった。

柔らかな肉の中で濡れた音を立てて、中のモノが少女の体の亀裂を押し分けて産まれようとしていた。

それは、白い赤子だった。蕾に宿っていた出来損ないの肉塊とは違い、ちゃんとした赤子の形をしていた。ただ、白かった。皮膚も、爪も、目も、口腔も、舌も、全てが死者の骨の様に白かった。

「んっ……」

小さい呻き声が聞こえた。長政が視線を上げると、少女の瞼はいつのまにかうっすらと開き、桜色に色づいた唇からは嬌声の様な声が僅かに漏れ出ていた。

少女と目が合った長政は、金縛りにあったかのように動けなくなってしまう。刀を押し進めるどころか、瞬きすら出来ない。

白い赤子は、長政の刀を握ったまま這い上がり、手を伸ばす。ふくふくと柔らかそうな、白い腕を長政の方へと。赤ん坊に似つかわしくない嗜虐と愉悦の笑みを浮かべて、ただ、長政に手を伸ばし、その手の平が長政の体に触れようかという瞬間――

突如、見えない何かに阻まれたかの様に赤子の腕は止まり、不快な音を立てて弾け飛んだ。

直後、顔に笑みが張り付いたままの赤子の上半身にぶくぶくと、

水膨れの様な大小の瘤が浮かび上がり――一斉に破裂した。

「ひぎぃっ……！」

少女は背筋をのけ反らせ、苦痛で叫ぶ。

固まっていた長政の体が、自由を取り戻す。長政は少女の叫びに構わず、刀に渾身の力を込めて、少女の体を真っ二つに切り裂く。

ぶつり、と肉を絶つ音が響く。少女の体は喉から、下へと向かって両断されていた。

少女の頭ががくん、と力を失ったかの様に傾ぎ、直後、全身が戦慄き始めた。

ぞわりぞわりと音を立て、少女の傷口から、目から、口から、腹から上の部分を失った赤子だったモノから、大量の蟲が湧き出てきた。

まるで、彼女らの体には血肉の代わりにその蟲がみっしりと詰まっていたかのように。

蟲は、黒い百足だった。親指程の長さしかなく、その代り幾千匹という数が多量の足を使いかさかさと蠢いていた。注意して見ると、百足の牙は人間の犬歯の様に白く、歯と歯の間には人間と同じ赤い舌がチロチロと垣間見えていた。人と同じ口腔を持つ、百足。常識では考えられない、歪んだ姿を持つ蟲。

長政が思わずそれに見入っていると、最初は活発に動いていた百足の動きが鈍くなり、ぴたりと止まる。黒光りしていたその身は瞬く間に白く、乾いた色へと姿を変え――砂の様に崩れていく。同じ様に、木の洞に詰まっていた少女の体も、崩れていった。

瞬き、三つ。その間に少女と蟲は灰の様に白い砂へと姿を変え――その砂さえ、そう強くない風に吹かれ、跡形も無く消えてしまった。

「終わっ……た……？」

夢の様な光景に長政は呆気に取られた様に呟いた。それに返答する者は、いない。

暫し、刀を構えたままでいたが、何も起こらない。どうやら本当に、これで終焉の様だった。

ほ、と溜息を吐き、長政は手近にある太い枝に寄り掛かった。すぐに下に降りて静を迎えに行かなければ、と考えていると、突如、長政の耳にぱきん、という軽く、それでいて不吉な音が響いた。同時に、体がぐらりと傾ぐ。

「――あれ？」

「宿主」を失い、枯れ木となった桜の枝は長政が寄り掛かった事で簡単に折れ――その結果、長政は本日二度目の転落を果たした。

「いっ……てぇ――――」

背中の痛みにぼやきながら、長政は歩いていた。幸い背中を強打する位ですんだが、日に二度も高い所から落ちるとは、今日は厄日かもしれない。それとも、日頃の行いのせいか。長政は、信じてもいない神を呪った。

とはいえ、気を失わずに済んだ事には大いに感謝したかった。長政は歩く速度を上げる。向かっているのは、静の許だ。「宿主」と「百奇（ひゃっき）」が消滅したとはいえ、静が負った怪我が無くなる訳では無い。

来た道を足早に戻ると、長政達が逃げ込んだ倉庫が見えてきた。その側に、見覚えのある小柄な少女が転がっているのをその目に捉え、長政は走り出す。

静の許に駆け寄り、しゃがみこむ。静は脚だけでなく、脇腹にも怪我を負っていた。地面に、小さな血だまりを作っている。

「……おい。生きてるか、あんた」

声に、焦りが滲む。青白い頬を遠慮がちに軽くはたくと、長い睫毛が震え、瞼が開いた。

「……長政……さん？　良かった……無事だったんですね。怪我は……ありませんか……？」

弱々しい声。だが、生きている。

長政は悟られないように安堵の溜息を吐き、静の体を慎重に抱き上げた。

「俺は傷一つ無いよ。っていうか、俺の心配より自分の心配しなよ、あんた」
「う……」
傷に響くのか、静が辛そうに呻く。だが、このまま動かずにいる訳にもいかない。長政は出来るだけ振動が伝わらない程度の速さで歩き出した。
入ってきた時の記憶を掘り出し、門の方向へと見当をつけ、その方向へと歩く。暫く無言で歩いていると、静が弱い力で長政の服を引っ張った。
「どうしたの？　もっとゆっくり歩いた方がいい？」
傷に障って辛いのかと考え尋ねると、静は首を振って言った。
「いえ……あの、このままだと、長政さんの服が……汚れるかと思って……」
「あ――……。そういうの、気にしなくていいからさ……」
この期に及んで人の服の心配とは、やはり静は本格的に馬鹿だ。そう、長政は思う。
また歩いていると、静が再度長政の服をくいくいと引っ張った。長政は溜息を吐き、声を掛ける。
「今度は何？」
「あの、『宿主』は……」
「ん、あんたが言った通りだったよ。枝の洞（うろ）に、女の子がいた」
静は、堕胎と間引きによる「子殺し」の穢れが、この怪談の核と

なったのだろうと考えた。あの桜の大木が水子を宿した蕾を生やし、長政が木の上に少女の姿を見たのは、あの桜に「ケガレ」の素となったモノが隠されているからだろう、と。

大木の枝に出来た、洞(うろ)。その空間に、間引いた子供の死体の一つを隠し、骸は「ケガレ」を呼び寄せ、宿した。

「なんか斬ったら虫が出てきて、砂みたいになって消えちゃったんだけど、それで良かったの？」

「大丈夫です。『宿主』も『ケガレ』もちゃんと消せましたから……。もうこの寺の『怪談』は無くなりました。……もう、誰も死ぬ事はありません。……本当に、ありがとうございます」

それが何よりも嬉しいという風に、静は安堵の笑みを浮かべる。そこに含まれているのは、純粋な喜びと、長政への感謝。

長政はその微笑みから目を逸らし、「ああ、そう」と、素っ気なく返した。

出口へと向かう速度が、僅かに早くなった。それに気付いているのかいないのか、静は長政へ尋ねる。

「……えっと、長政さんは、行きたい場所とか、やりたい事とか……そういった上京の目的みたいな物は無いのですか……？」

「無いよ。そーいうの全部。夢も、目的も、宿も無い。ついでに言うなら金も無いね」

唐突な問いに、長政は簡潔に答える。眼前に、門の姿が見えてきていた。

この寺を出たら、医者を探さなければ。幸い静の意識はしっかり

としている様だから、医者がどこにあるか位は言えるだろう。静を医者に預けたら、己の身の振り方をまた考え直さなければならない。

思考が、現実へと引き戻されていくのを感じる。そんな取り留めも無い事を考えていたから、続く静の言葉への反応が遅れた。

「それでしたら……私の家に来ませんか？」

「……は？」

長政の歩みが、止まる。

明らかに戸惑っている長政に構わず、静は言葉を続ける。

「きっと、あなたの見た『景色』は、『怪談』に対抗するのに有効な手段になると思うんです。『術』が使えなくても『宿主』を退ける事も出来ましたし、長政さんには十分素質があると思います。ですから――」

静は、いっそ無邪気な程にとどめの一言を口にした。

「――長政さんも、讀師（よみし）になりませんか？」

「……え、えええええ――――……？」

少女の無邪気な勧誘と、それに困惑する少年の間抜けな疑問符。どこか間の抜けたそのやり取りを、西の空へと沈みかけていた月が静かに笑った。

間話　赤の追想

――赤い。

何もかもが、赤い。

床も、壁も、天井も、全て。

赤い海に転がるのは、かつて人だった部品達。挽肉の様に蹂躙されたそれらは、元が腕だったのか、足だったのか、顔だったのか、腸だったのか、区別がつかない。

それほどの、惨劇。

床に広がった赤い海の中に、一人の男が立っていた。

黒い僧服を纏(まと)ったその男は、室内だというのに笠を目深に被り、口許しか見えなかった。

男は惨劇の場に似合わない軽薄な笑みを浮かべ、言う。

「いやあ、人の命なんか呆気ないモンッスよねぇー。――ねえ？」

血と脂の広がる海の向こう。男から大分離れた所に、一人の少年が立っていた。

年は十歳を二つか三つ越えた程度の、まだ幼いと言っていい顔立ちをした少年だった。人とは違う、澄んだ緑色の瞳と、無造作に伸ばされた赤い髪。『外』では嫌われる、他とは違う異端。少年はぼろと言ってもいい程の粗末な着物を身に纏い、そこから露出する細い手足や胸板には、痛々しい痣と傷跡が刻まれていた。

少年は男の問い掛けには反応を見せず、俯き、いまや壁や天井のシミとなってしまった者達を見つめていた。人とは違う、深緑の瞳で。

「『喜び』、『哀しみ』、『怒り』、『喜び』……。人間の感情ってのは大体四つで説明できるみたいッスけど、こういう場合はどうなんスかねェー？」

僧服の男は赤い海を渡り、少年へと近づく。男は刀を手に握っており、状況から見て少年を床に広がるシミの仲間入りをさせようとしている様に見える。だが少年は逃げ惑う事もせず、ただ立ったまま床に広がる血と脂の海を見つめていた。かつて、自分の飼い主だった者達の残骸を、淡々と。無感動に、無表情に見つめていた。

男は少年の目の前まで歩き、止まる。にい、と厭（いや）らしい笑みを浮かべた男は、腰をかがめて尋ねる。

「今、キミはどんな気持ちなんでしょうねェ……？　ちょーっとボクに教えてくれないッスかねェー……」

「……別に」

「んー？」

少年が、顔を上げた。男の問い掛けへの答えを、淡々と言う。

「別に……何も。……結構、どうでもいい」

無感情で無気力な、言葉。男は少年の瞳からその言葉が偽らざる本心だという事を悟り、心底楽しそうに口の端を吊り上げた。

「『どうでもいい』ですかァ……。それはちょっと予想してなかったッスねェー。いいんですかァ？　あーんなに酷い事されてたのにィ」

ともすれば傷を抉る様な言葉にも、少年は特に感情の揺らぎを見せる事は無かった。まるで、最初から感情が抜け落ちている様に。

「無表情」という表情しか浮かばない少年の顔。男は少年の頬を、存外に優しく撫でてやった。

「キミ、名前ありますゥ？」

「……無い」

「でしょうねェ……」

男は腰を落とし、少年と目線を合わせた。とはいえ笠に阻まれ口許しか見えず、男の顔は少年には分からなかった。

「……なーんにも持ってないキミに、ボクがちょっと贈り物をしてあげましょう」

「贈り物……」

「ええ……。細やかなものしか無いッスけどねェ。……一つ目は、これッス」

そう言って、男は持っていた一振りの刀を、少年に差し出した。随分と立派なそれを、少年は一瞬躊躇いながらも受け取る。刀は少年には大きく、ずしりとした重さを持て余す。だが、少年は決してそれを放り出そうとはしなかった。

「身を守るのに使えますし……その他にも、色々と」
「色々？」
「いずれ、分かるッス」

少年はそれを怪訝に思いながらも、追及はしなかった。貰った刀を、抱き締める。その姿を見て、男は少年の頭を撫で、言葉を続ける。

「二つ目は、名前ッス」
「名前……」
「ええ……。君の名前は、『長政』です」
「長政……」

少年は、小さく口の中で長政、長政、と己に初めて与えられた名前を反芻（はんすう）した。
「大丈夫ッスかあ？」

男の問いに、少年はこくりと頷いた。男はそれを見て、いい子だ、とでもいう風に少年の頭を撫でてやる。

そして男は口許に浮かぶ笑みを一層濃くし、少年に告げる。

「――じゃあ、最後に一番大事なモノを、あげましょう」

男の酷薄な笑みに気付かず、少年は素直に頷いた。口許だけを笑いに歪めたまま男は少年の耳に口を寄せ、毒とも、呪いとも言える言葉を注ぎ込んだ。

「――――――――――――――――――――――――――――――」

……五年前の、月の無い晩の出来事だった。

七、　一夜明けて

――嫌な、夢を見た。

目を開け、最初に飛び込んできたものが見慣れない天井だった事に、最初長政は酷く戸惑った。何度か目を瞬かせ、寝起きの回転の鈍い頭を働かせて昨夜の記憶を探る。そして、ここが昨日出会った静という少女の家の一室だという事を思い出し、眉間に皺を作った。

あの後、長政は静が提案した通り、彼女の家に招かれた。というよりも、そうせざるをえなかった。

寺の門を抜けた長政を待ち構えていたのは静の家に仕える讀師（よみし）だという数人の男達であり、対面するなり長政の腕の中にいる静の怪我について、声高に詰問された。静が説明し、制してくれなかったら随分と面倒くさい事になっていただろう。

怪我は静の家で治療するらしく、長政もなし崩しにそれに同行する事となった。

まず驚いたのが、静の家というのが、長政が三毛猫と出会った、あの豪奢な武家屋敷だったという事。静が家までの道中でした説明によると、讀師（よみし）を束ねる、通称「御三家」と呼ばれる三つの家があるらしく、静はその一つである「傘松家」の当主の娘であるらしかった。出会った時からなんとなく世間ずれした様子は感じていたが、まさか本物の箱入りお嬢様だったとは。しかも、あの武家屋敷の娘。

長政の頭に不覚にも『運命』という言葉がぱっと明滅したが、一瞬の後にそれを追いやった。

屋敷の門を潜り抜けてからは、随分と慌ただしかった。

まず怪我の治療をするから、と静と引き離され、その後は「何故あの寺にいたのか」「静のあの怪我は一体どういう事か」「何故出て来られたのか」「そもそも貴様は誰だ」と、質問攻めだった。

流石に嘘を付くのは後々面倒な事になるからと長政はそれらの質問に概ね正直に答えたが、讀師の男達の懐疑的な視線が和らぐ事は無かった。そもそも寺から屋敷に来るまでの間長政はずっと静を抱きかかえていたのだが、歩いている間長政の背中にはずっと敵意の視線が刺さっていた。あの時は彼らより恐らく立場が上である静がいたから睨まれるだけだったのだろう。静の目が届かなくなったら、これだ。長政としてはそういった感情を向けられるのは慣れているが、些か面倒くさい。延々と同じ様な質問を繰り返す尋問に辟易していると、助け舟が出た。静が口利きしてくれたのか、明らかに長政を尋問していた男達とは立場が上なのであろう年配の男がやって来て、「客人に失礼な事をするな」と男達を一括した。

長政はやっと解放され、とりあえず休むようにとこの部屋に通された。部屋には布団に夜着、いつ用意したのか血で汚れた着物の替えまで用意されているという周到ぶりだった。

自分の置かれた状況に一抹の面倒くささを感じたが、とにかく体は疲れていた。手早く夜着に着替え、布団に潜り込んだ。それが、もう空も白み始めた頃だと記憶している。

長政は布団から上半身を起こし、部屋を見回した。

部屋の中には殆ど何も無く、隅に文机と布が掛けられた鏡台が置かれている位だった。とはいえ、どちらもぱっと見ただけで上等な物である事が分かり、この家の豊かさを示している。

昨夜は気付かなかったが、夜着も布団も随分肌触りが良い。良すぎる位だった。安い宿屋のそれしか知らない身としては、少々落ち着かない。

方々に跳ねた、短く刈った髪をかきあげ、長政は自分が随分と寝汗を掻いていた事に気付く。何か、嫌な夢を見ていた事は覚えているが、どんな夢だったかは思い出せない。常人なら昨夜の「怪談」に魘(うな)される所だろうが、生憎長政の神経はそこまで繊細ではない。

長政は夢について考える事を止め、夜着の袖で顔の汗を乱暴に拭う。手拭いは昨日静の手当てに使ってしまったので、しょうがない。そういえば、刀と荷物もあの寺に置きっぱなしのままだった。

「……そういや、大丈夫かな、あの子」

静とは、昨夜屋敷について直ぐに別れたきりだ。命に係わる怪我では無かったとはいえ、暫くは布団から起き上がれないだろう。静は「怪談」を退けた事について長政に礼を言っていたが、寧ろ礼を言うべきは長政の方だ。彼女が長政を身を挺(てい)して庇ったからこそ、長政はこうして無傷でいられた。そういった意味では、長政は昨晩男達に詰問された事に文句は言えないのだが、あれはなんだか、様子が違った。静の怪我を心配し、長政に憤るというよりも、もっと、利己的で、独善的なものを感じた。

ほんの少し考え込み、長政は、布団を跳ね除(の)けた。用意された着替えを手に取る。この着物も、随分上等な物だ。本当は昨夜脱ぎ散

らかしたままの自分の着物をそのまま着ようと思ったのだが、思いの外血で汚れており、黒い染みを作っていた。流石に無理だ。

汚れた着物を探っていると、指先が硬い物に触れる。取り出してみると、昨夜静が護身用にと長政に渡した髪飾りだった。持ち主から引き離されたそれは、相変わらず硬質な輝きを放っていた。

夜着を脱ぎ、肌触りの良い袖に腕を通す。袴を履き、手早く紐を結んだ。派手さはないが、品の良い配色。

着替えを終えた長政は、布団を適当に畳(たた)む。血で汚れた着物については少し迷ったが、置いておく事にした。誰かが捨ててくれるだろう。

部屋に差し込む光を見るに、まだ日は登り切っていない。静が起きているかどうかは分からないが、一目顔を見て、礼を言って、髪飾りを返して、この家から出よう。荷物と刀は後で回収すれば良い。

静は「讀師(よみし)にならないか」と長政を誘ったが、長政にその気は毛頭無かった。何か出来る事があるとも思えないし、長政には静の様に無辜(むこ)の人々を救いたいという志も、正義感も無い。

大体、静の様な人間は、長政の様な先の無いどうしようもない人間とはあまり深く関わらない方がいいのだ。

障子を開け、部屋から廊下へ足を踏み出す。朝とはいえ、それなりに暑さを感じる初夏の日差しが照っていた。廊下に面した広大な中庭では、色鮮やかな花々や木々が植えられている。遠くに見える池には、華美な衣装を纏った鯉達が優雅に泳いでいるのが見えた。

「……金持ち」

特に意味の無い言葉を呟き、長政は長い廊下を歩く。静が何処にいるかは分からないが、適当に見かけた者に聞けば教えてくれるだろう、と考える。もし昨日の男達だった場合は素直に教えてくれないかもしれないが、その時はその時だ。

そんな事を考えながら長政は廊下の角を曲がり――

「――あ、長政さん！おはようございます！」

やけに弾んだ声で朝の挨拶をする、静と遭遇した。

「……え？」

思わず、間抜けな声が漏れる。長政の前に立つ静は、昨日の水干と緋袴という古めかしい恰好では無く、年頃の少女に似つかわしい桃色の小袖を着ていた。花を描いたあでやかな模様に、それに合わせた精緻（せいち）な刺繍が施された帯。恐らく随分と高価な物なのだろう。だが、華やかなその衣装も、静の清廉（せいれん）な美しさを引き立てているだけに過ぎなかった。

抜ける様に白い肌に、それと対比する様な黒檀の瞳と髪。華奢な体つきだが、ほんのり色づいた頬は、触ったら柔らかそうだった。こんなに綺麗な子だったっけか、と長政は思わず見とれる。

静は、昨日と全く変わらない笑みを長政に向けていたが、長政が立ち尽くしているのに気付くと、その表情を少し曇らせた。

「あの……長政さん、どうかしましたか……？」

「ん、あー……怪我は大丈夫なのかなって思ってさ。結構深くなかった？　静殿の傷」

まさか見とれていたとは言えず、長政は咄嗟に怪我の話を持ち出した。

とはいえ、静の怪我が気にかかっていたのは事実だ。昨日の怪我の具合を考えると、適切な治療をしたとしても翌朝直ぐ動き回れるようなものではなかった筈だ。だが、長政の目の前に立つ彼女は特に脚を引きずったりする様な様子もなく、真っ直ぐ立っている。

長政の質問に、静は快活に答える。

「私達の使う『術』には、怪我の治療や呪いを祓う効果を持つものもありますから。あれ位の怪我だったら、一晩で治せるんです。ホラ」

そういって、静は着物の裾を割った。昨夜痛々しい程にずたずたに切り裂かれていた右脚には傷一つ残っておらず、包帯さえ巻かれていない。最初から傷など無かったかのようだ。

長政の心配は、取り越し苦労だったらしい。大事ない静の姿を見て、長政は小さく溜息を吐いた。

長政の溜息に気付いた静は裾を戻し、おずおずと尋ねる。

「あの、もしかして心配をかけてしまいましたでしょうか……」

「んー、まあしたって言えばしたけど、静殿が元気そうだったから良かったよ」

長政にしては珍しく本心を言うと、静は頬を照れた様に赤らめた。
ふと思いついて長政が静の頭を撫でてやると、静の頬が更に紅潮した。暫く撫でられるままだったが、小さく、抗議の声を上げる。

「あの……あまり子供扱いしないで下さいませんか」
「子ども扱いねー、静殿、いくつ？」
「じゅ、十六です……」

消え入る様な声で言う静に、長政はわざと鈍い風を装って返す。

「じゃあ、俺の方が二つお兄さんだ。子ども扱いされても文句言えないんじゃない？」

好き勝手に頭と髪を撫でて、適当な所で解放してやると、静の顔は林檎の様に真っ赤だった。顔を手で覆い、必死で悟らせまいとしているが、ばればれだ。

「あれ、静殿顔赤いよ？　どうかした？」
「～～～～～～～～～っ！！」

長政の意地の悪い指摘に、静は睨みつけて返す。だが、羞恥の涙が眼の端に滲んだ状態、しかも上目遣いで睨みつけられても怖くもなんともない。

さすがにからかいすぎたか、と長政は静の怒りの矛先を逸らす為に頭を巡らせ、一つの事を思い出した。袖の中を探り、あるものを取り出す。

「すっかり忘れてたけど、これ、あんたに返すよ」
「あ……」

静から借りてそのままだった、銀色の髪飾り。その銀色の輝きを見て、静の表情が少しだけ和らいだ。頬の赤らみはまだ引いていなかったが、長政への怒りはすっかり忘れてしまったようで、静は素直に長政の手から髪飾りを受け取り、頭につける。

上等な絹糸の様に艶やかな黒髪と、月の様に冴えた輝きを放つ銀色。あるべき場所に戻ったその髪飾りは、主を飾り立てる役目を務めていた。

髪飾りに刻まれた精緻な文様を見て、長政はある事を思い出す。

昨夜、髪飾りを受け取ってから、長政に触れようとしたり、近づこうとした「百奇（ひゃっき）」は皆一様にその形を崩した。静はこの髪飾りには僅かだが結界の力があると言っていた。だが、昨夜のあの様子を見ると、その力が小さな物だとはとても思えない。それとなく問いかけると、静はあっさりと答える。

「ええ、この髪飾りのお蔭です。ちゃんとあなたを守れた様で、安心しました」

そういって、静は微笑む。その顔には、先程からかわれた事への怒りは微塵にも残っていなかった。傍から見て少し心配になるほどの御しやすさだ。話を故意的に逸らした自分を棚に上げて、長政は勝手な事を考えた。

「あんたさ、その髪飾りの力は小さいって言ってなかった？」

「だって、そうでも言わないと、長政さん受け取ってくれないじゃないですか」

静の言葉に、長政は詰まる。確かに、あれ程の力があるのだったら怪我を負った静に持たせるべきだと考えて、長政は受け取らなかっただろう。そこまで自分を見透かされていたという事に、長政は言い様も無い居心地の悪さを感じた。

渋い顔をする長政に、静はどこか誇らしげな様子で言う。

「それに、この髪飾りは本来『術』を使えない人を守る為に作られた物ですから。私が持っていても、そこまで強い効果は無かったと思います。……だから、これは長政さんに渡した方が良かったんですよ」

「ふーん……」

意識して気の無い返事を返す長政を余所に、静は白く細い指で髪飾りの細かな文様をなぞる。それは、慈しむ様な手付きだった。

「本当に、これが役に立って良かったです。……お父様から貰った、大切なものですから」

そう呟いた静の顔には、言葉とは裏腹に一抹の哀愁が浮かんでいた。それがいやに気になった長政はそれに触れようと口を開き――しかし、足下にすり寄ってきた生温い物体の存在によってその機会を失った。

「んー……？」

視線を足下に向けると、そこには三色の模様に彩られた巨大な毛玉がどん、と鎮座していた。長政の視線に気が付いたのか、それは毛玉の中に埋めていた顔を上げ、にゃあ、と一声鳴いた。

「あれ、お前……」

見間違え用も無い。昨夜、長政がこの屋敷の塀に凭(もた)れかかっていた時に出会った三毛猫だった。

「長政さん、この子の事知っているのですか？」

「知ってるも何も……言っただろ？　この猫に着いて行って、あの寺を見つけたんだよ。俺」

「まあ。では、やはり長政さんの言っていた三毛猫って、この子の事だったんですね」

「この猫、静殿の飼い猫？」

「ええ。私が小さい頃からずーっと一緒なんですよ」

「へえ……」

そんな会話をしながら、長政は足下に鎮座する猫の巨体を抱き上げた。猫は特に抵抗も見せずに、長政の腕に収まる。喉を撫でてやると、機嫌良さそうに目を細める。猫が首を動かしたので、毛に埋まっている首輪と鈴が見えた。そういえば静の髪飾りの模様はどこかで見た覚えがあるものだと頭に引っかかっていたが、この猫の首輪についた銀色の鈴に彫られたものと、同じものだった。偶然にしては、少し出来すぎている様な気がする。

「あのなー、昨日はお前の案内のせいでエライ目に会ったんだぞー」

そう抗議しながら背を撫でてやると、三毛猫はそんな事は知らぬと言った風に尻尾を振り、喉を鳴らした。長政の腕の中で大人しくしている三毛猫を見て、静は驚いた表情を浮かべた。

「珍しいですね……。牛若丸は私達家族以外の人……特に、男の人には絶対懐かないのに、こんなに懐いているなんて」

「……牛若丸って？」
「この子の名前です。……ねえ牛若丸？　あなた、長政さんの事、そんなに気に入ったの？」

そう言って、静は長政の腕の中の猫の喉を撫でる。飼い主に撫でられ、猫は一層目を細め、喉を鳴らした。

長政の腕に伸し掛かる圧倒的な重量感を考えると、牛若丸というより寧ろ弁慶といった方が相応しいのではないかと思ったが、言葉には出さないでおく。

「静殿が小さい頃から一緒って事は、この猫結構年寄なの？」

長政の腕の中で寝そべる牛若丸は毛色も艶やかで、とても十を越えているであろう年寄猫には見えない。長政の問いに静は少し考え込み、答える。

「そうですね……えーっと、確か、今年で五〇二歳だったような」
「……は？」

聞き間違いか、先程の仕返しでからかわれているのかとも思ったが、静の表情は真剣そのものだった。

「五〇〇年前に私達のご先祖様の初代御当主様に拾われたらしいんですけど、その時何かが切っ掛けで不老不死になってしまったそうなんです。それ以来、ずっと『傘松』の家に飼われているんですよ」
「不老不死、ねえ」
「……やっぱり、信じられませんか？」
「いや、信じるよ。あんたが嘘を付くとは思えないし」

俄かには信じられない話だったが、長政は昨夜、既に芝居か夢幻(ゆめまぼろし)か、といった出来事を体験している。それに、この国の天皇も七十数年の時を老いずに生きている「不老不死」だ。今更五〇〇歳の猫如きで驚きはしない。

信じる、という長政の言葉に、静は微笑む。今日は、朝から静の笑顔しか見ていない様な気がした。

「なんかあんた、今日はやけに笑ってるね」

「えっ！？　そ、そうでしょうか……。あ、あの、何か気に障りましたか？」

長政の指摘に、静は急に狼狽したように言葉を乱す。その頬は、先程と負けず劣らず赤くなっている。その様子だけを見ると、昨夜の怯えを持ちながらも凛としていた少女と同じ人物とは到底思えなかった。

目の前で面白い程慌てふためく静に、長政は何を言おうか考える。だが、その思考は不意に乱入してきた声によって遮られた。

「――お嬢様」

聞こえてきたのは、まるで青空の様に快活な声。だが、その声に呼ばれた瞬間、今まで静を彩っていた年相応の少女めいた表情はさっと姿を消した。静は振り向き、自分の後ろから掛けられた声の主を確認する。

そこに立っていたのは、長政にも見覚えのある人物だった。昨夜、散々詰問された時に、一番声高に長政の事を詰っていた青年だった。

髪も着物も、崩した所も無く清潔感が溢れている。整った顔には実直そのものという表情を浮かべているが、一度その口許を綻ばせば、街を歩く女たちを一瞬で虜にしてしまうだろう。それ程の、美青年だった。

「南条……。私に、何か用ですか」

だが、返される静の声は事務的で、側で聞く者に警戒心まで感じさせる。

連れない返事に南条と呼ばれた青年は傷ついた様な顔をした。青年の視線が、一瞬だけ静の隣に立つ長政へと向けられる。視線は直ぐに静の方へと戻されたが、長政は南条の目に浮かんだものを見逃さなかった。

穢らわしいものを見るかの様な、侮蔑と、蔑みの視線。そして――僅かな嫉妬。

「いいえ、お嬢様では無く、そちらのお客様に少々御用がありまして――」

「へえー、俺みたいなどこの馬の骨とも知れない卑しい田舎者に何の用？　アンタ」

長政はわざと南条の言葉を邪魔し、挑発する様な言葉を投げつける。すると、南条は不快感を分かり易く顔に表した。今すぐにでも長政に掴みかかりそうな程だった。だが、南条は静が長政の言葉に不思議そうな顔をしているのを見ると、その感情を押し殺し、己に課せられた役目を告げる。

「――御当主様が、お客様と話をしたいと仰せです。私(わたくし)は、御当主様の部屋までそちらのお客様を連れて来る様に、と承りました」

八、　食わせ者の探り合い

長政に対して終始無言を突き通す南条に案内されて入った部屋は、そこだけで小さい長屋の部屋が何軒か入る程の大きさを持っていた。傷一つない板張りの床に、白い土壁。調度品などは無く、壁に掛けられた長刀（なぎなた）位しか物が無い。その部屋の、中央に正座していた人物は、部屋の中に入ってきた長政を見て涼やかな声を掛ける。

「ああ、遅かったな。随分待ったぞ」

声の主は、三十を幾つか越えているだろう女性だった。昨日見た、静の着ていたものより濃い色の緋袴に、純白の千早を羽織った巫女装束。腰まであるだろう黒髪は、球形をした銀の髪飾りで一つに纏められている。女性らしくない言葉づかいだったが、それが凛とした雰囲気を彼女に添える役割をしていた。

当主、という響きから威厳のある老人の姿を勝手に想像していた長政は、その姿を見て少なからず驚いた。

女性の言葉に、長政の後ろにいた南条が手短に謝罪を述べた。最初からそういう指示だったのか、案内という役目を果たした南条は、襖を閉め、立ち去る。ただ、間際に長政を敵意に満ちた視線で睨みつける事は忘れなかった。

廊下を歩く音が遠ざかっていく。部屋の中は、長政と女性の二人きりになった。

「確か、長政くん……だったか。立っていないで、ここに座りなさい」

彼女の目の前にある座布団を手で指し、言う。長政は、素直にそれに従った。
長政が正座し、二人が向き合う形になった所で、女性は口を開く。
「先に、自己紹介を済ませておこうか。私の名前は、傘松綾（かさまつあや）という。この傘松家の現当主であり……君が昨日会った、静の母親だよ」
その言葉に、長政は今一度驚く。静が現当主の娘だという事は知っていたから、目の前の女性が静の母親である事は容易に想像がつく事なのだが、綾と静には一目見て母娘であると分かる様な類似するものが無かった。纏う雰囲気も、操る言葉も、何もかも。綾は、とても十六の娘がいるとは思えない程の若々しさと美しさを持っていたが、顔は静とあまり似ていなかった。
切れ長の吊り目に、紅をひいた薄い唇。笑顔を作っているが、それが本物なのかは分からない。その瞳は、獲物を品定めしている獣の様にも見える。
静の持つ美しさが、咲いたばかりの初心（うぶ）な輝きを持つ、可憐な花の様な美しさだとしたら、綾のそれは抜刀した瞬間の刃の様な、確固とした強さを持つ美しさだ。迂闊（うかつ）に触れると、こちらの手が落とされる。
長政が黙ったままでいると、綾は苦笑して言う。
「似てない母娘だろう？　よく言われるよ」
「いえ……。あの、俺に用ってなんですか」
長政は言葉を選びながら、率直に言う。話は、早めに終わらせたい。
「随分とせっかちだな、君は。もう少し会話を楽しむ余裕というも

のを持った方がいい」
そう言って、綾は、に、と口の端を吊り上げた。そうすると、ますます獲物を品定めする獣の様な印象が濃くなる。
「まあ、大した話じゃないよ。静が、君に随分助けて貰ったと言っていたからね。母親として、娘を助けてくれた少年に一言礼を言いたいと思っただけだ」
「俺は、大した事はしてません。それに、しず……貴方の娘さんは、化け物から俺を庇って怪我をしました。俺を守る為に、大切な髪飾りを持たせてくれました。……助けられたのは、俺の方です」
「へえ。あの子、そんな事私には一言も言わなかったぞ。……ああ、君がそれを気に病む必要は無い。静のお人好しはもう病気みたいなものだからな。あれはもう本人の自己満足の様なものだよ」
ふう、と綾は溜息を吐く。それは、娘の行いに呆れている様に見えた。
「……例えそうでも、命を張って俺なんかを助けようとしたのは事実です」
思いの外自分が強い物言いをしてしまった事に長政は気付き、慌てて口を結ぶ。だが、綾は面白がる様な笑みを浮かべた。
「……意外だな、君がそういう反応をするとは。南条と静の話から、君はもっと情の薄い無礼な人間だと思っていたんだが。……ああ、別に静が君の悪口を言っていた訳では無いから、安心しなさい。基本的にあの子は人の美点しか口にしない」
「美点……ね。無い所から絞り出すのに随分苦労したんじゃないんですかね」
「君は中々捻くれているな。そうやって自分を卑下していても楽し

くないぞ？」
「事実ですから」
簡素な長政の返事に、綾は苦笑し、話の筋を元に戻す。
「まあ、確かに静は君の事を助けたかもしれない。だが、君の見たモノが無ければ、『宿主』に辿り着く事は出来なかった。……君の力が無ければ、静も、君も、死んでいたよ」
「力って言っても、あんなの俺が偶然見た幻覚――」
「違う」
綾は、有無を言わさず長政の言葉を断ち切った。気圧され、長政は続く言葉を喉の奥に押し込まずにはいられなかった。
「――静から聞いたが、君は、『宿主』のいた桜の木の上に、女の子が座っているのを見たのだろう？」
「そうですけど、それとこれが何の関係があるんですか。俺の斬った『宿主』は、その子より年が上の女の子でしたよ」
「それが、関係あるんだよ。……あの寺が『子殺しの寺』と呼ばれていたのは聞いていただろう？　その、親に間引かれて殺されたと思われる子供達の中に、君の見たのと同じだろう十歳位の赤い着物を着た女の子がいてね。今朝、『宿主』がいた桜の木を調べさせたら、君が『宿主』を見た枝の洞の中から、子供の白骨死体が見つかったよ。ご丁寧に、赤い着物も側に突っ込まれていた。……隠し場所に困って、あの木の洞に入れたのだろうなあ。随分と大胆な事をするものだ」
「その死体が原因で、あの桜は『宿主』になったって事ですか」
「そうとも言えるが、そうでないとも言える。……この話には続きがあってな。発見された死体は、低く見積もっても十三、四歳。調べた所、妊娠していた形跡があったよ」

「……それって」
「察しが早いな。……恐らくその子は、殺されたのではなく、売られたんだろうよ。姦淫はあの寺の宗派では重大な御法度だが、間引きや堕胎に手を貸していた様な奴らだ。それ位、何とも思っていなかったんだろうなあ……」

寺は本来、女人禁制だ。だから、姦淫の罪を犯さない為に小姓や稚児といったものが存在する。だが、それらは所詮代替品に過ぎない。もし、御法度をものともしない者達の中に、親の庇護を失った少女を放りこんだらどうなるか。結果は、言うまでもない。
長政は、木の上に居た少女の胎に、引き裂かれた様な大きい傷があった事を思い出す。散々に使われ、体が成長し、宿したら腹を裂かれて、亡骸は弔われる事も無く木の洞に詰められる。少女の辿った道のりは、あまりに悲惨すぎた。

「男が腹を裂かれて殺されるのは、多分自分がそうされたからなのだろうな……。いや、何とも気が滅入る話だよ。あの木の上に捨てられていた少女と、堕胎によって殺された赤ん坊。二つの穢れが原因で、あの桜は『宿主』となって『怪談』を産んだ。……何故、男女の痴情の縺れが原因の話になって広まったかは分からないが」
綾はやり切れない、と言う風に首を振る。少女を哀れみ、心底同情している様だった。
――だが、それは演技だ。
「……で、その可哀そうな女の子の話まで持ち出して、俺に何が言いたいんですか、貴方は」

綾にも、少女の悲惨な人生について思う所はあるかもしれない。だが、綾の話の本筋はそこではない。どんな悲劇であっても、それは須らく過去の他人のモノだ。長政は少女の話を聞いても何の感情も湧かなかったし、綾とてそれは同じだろう。

「ほう……泣き落とし路線はきかないか。色仕掛けの方が良かったか？」

「俺、清楚な年下が好みなんで」

「冗談だ。本気にされても困る。……まあ、率直に言うと、君が見たのは、『宿主』の本質に近いものなんだよ。母に売られ、父に殺された可哀そうな女の子に至る為の重大な手がかりだ。そして、それは君だけにしか見えないものでもある。……何故見えるのかは、分からないか」

「どういう、意味ですか」

「そのままの意味さ。君の目には、そういった能力がある。『怪談』を読み解き、『宿主』を探り当てる私達讀師の仕事にとても役立つ力が、ね」

そういう事か。長政は昨夜静に言われた言葉を思い出す。

「たった一回起こっただけで判断するのは、危険だと思いますよ。俺だって、あんな光景見たの初めてなんですから。……次に、同じモノを見る保証も無いです」

「ああ、何も今決めつけた訳じゃあない。ちゃんと、前例があるんだよ」

「前例、ですか」

「ああ。数十年に一回な、君と同じ力を持った者が現れるのさ。もっとも、君の様な御三家の讀師(よみし)以外の、全くの部外者がそうだった例はそう多くないけれどね」

そう言われても、長政には全くピンと来るものが無い。「ケガレ」も、「百奇(ひゃっき)」も、「宿主」も、「怪談」も、長政はこの世にそういったものが存在する事なんて昨夜までは知らなかった。それなのに、急に自分にはそれを退ける為に有効な力があるなどと言われても、今一釈然としない。核心をわざと避けて、やんわりと丸め込まれている様な気がする。

長政がそう感じている事を察したのか、綾はそれとなく話の矛先を、逸らす。

「そういえば、君は静から私達(よみし)讀師について何処まで聞いた？」
「『怪談』に対抗する為に、讀師(よみし)が存在する事と、『怪談』をどうやって倒すか以外は、詳しくは知りません」
「成程。……じゃあ、話は長くなるが私達の事を少しだけ、話そう」

そう言って、綾は自らが所属する物についての話を始めた。

「正直な所、いつの時代から『怪談』や『百奇(ひゃっき)』が存在し、『ケガレ』が認識されていたのかは不明なんだ。だが、記録によると五百年前には既に我ら讀師(よみし)は存在し、組織を作って活動していたらしい。だから、それよりもずっと以前から、私達と『怪談』は戦っていたと考えて良いだろう。まあ組織と言ってもただの烏合の衆だった様だが、その中で統率者の様な事をしていた何人かが、このままでは駄目だ、と考えたらしい。自分たちの持つ『怪談』と戦う為の技術や知識や情報を、正確に後世の者達に伝えて讀師(よみし)の人材を育て、人々を救っていこう、とね。そこで作られたのが、私達『御三家』だ。

『術』や結界の構成を得意とした、私が当主を務める『傘末』。治療や『祓う』術に長ける、『三釘』。武術に優れ、『怪談』と戦う際に最前線に立つ事が多い『佐武』。この三つの家はそれぞれ、その最初の讀師達の集まりの中で一際優秀だった三人の直系の子孫でな。得意分野をそれぞれ担当し、五百年経った今でも協力関係を結んで『怪談』との戦いと、後進の育成に日々励んでいるという訳さ。

……まあ、ややこしい事をごちゃごちゃと言ったが、所謂一族経営の民間企業の様な物だよ、私達は。明治になる前は幕府お抱えだったんだがね……。今でも一応は公的機関の形を取ってはいるがな。『怪談』の特性上死人や行方不明者が出るのは避けられないから、情報収集として警察とは協力関係にある。……とはいえ、私達の活動自体大っぴらに出来るものでも無いからな、それぞれ表の顔を持っているよ。傘松は占い師、三釘は医者、佐武は武術道場……とな。こっちの方でもそれなりに儲かっているから、食いっぱぐれる心配は当分ないな。まあ、他にも色々と細かい所はあるが、私達についてはこんな所だ」

長政は、それを言葉を挟む事もせずに無言で聞いていた。特に驚いた様子も感心した様子も見せずに、綾の話を聞いている。

「君自身も巻き込まれたから分かるだろうが、『怪談』に巻き込まれて、『結界』に誘い込まれた者は助かる手段を持たない。ただ、嬲り殺しにされるのを待つだけなんだよ。――我らは、それを許さない。理不尽に巻き込まれて犠牲になる人々を救い、被害を喰いとめる為に私達讀師は存在する。……さっき言った事をもう一回言おう。君の目にある力は、『怪談』に対抗するのに、非常に強力な武器となりうる」

「……何が言いたいのか、さっぱり分かりませんね」

「分ってるくせに。――私は君を勧誘しているのさ。讀師にならな

いかって、ね。昨日、静からも言われたのだろう？」

長政は、僅かに顔を歪めた。薄々気づいてはいたが、実際に言葉に出された事による戸惑いが長政の中に広がる。綾の言葉は嘆願の体を取ってはいるが、その口調は断定的なものだった。服装も相まって、神託を下されている様な錯覚に陥る。

「長政くん、静から聞いたが君は『外』からの上京者だそうだな。しかも、宿を探していたという事は生活の伝手（つて）も無いのだろう？」

探りを入れる様な綾の言葉。長政はほんの少しだけ考え込み、渋々それを認める。

「……そうですね。十の頃に両親に死なれてからは、天涯孤独の身の上でしたから。兄妹も親戚もありません」

「ほう、若いのに随分苦労しているんだな。親を亡くしてその年までどうやって生活していたんだい」

「幸い、隣に住んでいた老人が何かと世話を焼いてくれました。十日前に、その爺さんの最期を看取って、北の方から当ても無く『東京』に来ただけです」

「ふむ、では君は今身寄りも金も無い、という訳か。なら尚更この話はうってつけだと思うけれどね。傘松に属する讀師（よみし）になった暁には、衣・食・住の全てを保証しよう。少なくない給金も出る。悪い話じゃないと思わないか？　……それに、君には人を救えるだけの力がある。だったら、その力を有効に使う事が君に課せられた義務だと思うけどね」

「う……」

それは確かに魅力的な話だった。けれども、長政は僅かに揺らいだ事を悟らせないように慎重に言葉を口にする。

「……お生憎ですけど、俺にはそういう正義感とか人を救いたいと思う信念とか、全く無いんで。例え俺に強い力があったとしても、本当の意味で貴方たちの役に立てる仲間になれるとは思えません」

無難な断り文句。こんなものは通用せず、更に何かしら喰いつかれると思ったが、綾は意外にあっさりと言葉の矛を収めた。

「ああ、確かに君の言う事にも一理あるな。静で実感していると思うが、怪我が多く、下手すれば死ぬ事もある様な仕事だ。直ぐに結論を出せとは言わないよ」

そう言って、綾は肩を竦める。

「二、三日ゆっくり考えた上で、私に答えをくれないか。その間、君はうちの客人として扱おう。寛(くつろ)いでくれて構わない。ああ、それと――」

そこで綾は一旦言葉を切り、長政に笑いかける。それは、今までのものとは違う、どこか柔らかさを感じさせるものだった。

「君がもし讀師(よみし)にならない事を選んだとしても、叩き出したりはしないよ。君の『東京』での生活や住居や職を、出来る限り世話しよう。……何なら、この家に讀師(よみし)としてでなく務めてくれたっていい」

「……いいんですか、そんな事言って」

「ん？　何故だい？」

「俺を食いつかせる餌が無くなります」

長政の言葉は無礼なものだったが、綾は全く意に介さず笑った。

「いいさ。それで結果が変わるのだったら、所詮その程度のものだという訳だしな。……それに、君は静の恩人だ。出来るだけ良くしてやりたい」

付け足された言葉には、ほんの少しだけ今までに綾が見せた顔とは違うものが混じっていた。それを何となく感じ取った長政は思わず綾の顔を注視したが、その時には先程ほんの少し垣間見えたものは微塵にも残っていなかった。

「――さて、これで話はお終いだ。長々と付き合わせてしまって済まなかったな。昼食を用意させるから、食べるといい」

切り替える様に、綾は言う。時計の無い部屋にいて気付かなかったが、もう随分と長い時間が経っていたらしい。長政が驚きの声を上げる。

「あれ、もう昼時なんですか」

「なんだ、気付かなかったのか。普通腹の空き具合で少しは分からないか？」

「いや……二、三日位なら何も食べなくても大体平気なんで」

「……君、一体どういう生活をしてたんだ？」

その問いに長政は答えない。綾の雰囲気から、本当にこの話は終わりの様だった。長政は綾に向かって一礼し、座布団から立ち上がる。

入って来た場所まで歩き、襖に手を掛けた時、後ろから声を掛けられた。

「――長政くん」

振り向くと、綾が座ったまま長政を見ていた。その表情には、綾らしくない逡巡が浮かんでいた。

「……どうかしました？」

何か言い忘れた事でもあったのかと、長政は何の気なしに問いかけた。綾は少しだけ躊躇（ためら）う様な素振りを見せ、口を開く。

「君に、個人的に聞いてみたい事があってね。どうか正直に、答えて欲しい」

「いいですけど。……なんですか、改まって」

「いや、ね。君……静の事を、どう思う」

予想していなかった質問に、長政は襖に手を掛けたまま一瞬だけ硬直した。

「どうって……昨日会ったばっかりですよ」

「まあ深い意味は無いんだがな。静のあのお人好しについてどう感じたか、率直に言って欲しいんだ。攻めてる訳では無いが、あの子が怪我をしてまで君を庇った事について少なからず思う所もあるだろう？」

長政は昨夜の静の言動を思い出し、少し考え込む様な素振りを見せる。だが、直ぐに話し始めた。

「――正直、馬鹿じゃないかと思います。勝手に人を庇って大怪我するし、人を助ける為なら自分は死んだっていいとか言い出すし、世間知らずのお嬢様のくせに、一丁前に気負ってるし。……俺みた

いな奴の言う事を、あっさり信じちゃうし」

綾は、黙って聞いている。真っ直ぐな視線と目を合わせているのが少し嫌に感じて、長政は微妙に目を逸らした。

「腹抉られてるってのに俺が無事だって分かったらニコニコしてるし、一晩経ったらやたら懐いてくるし、やたら笑いかけて来るし、色々ちょろいし……。誰かが守ってやらないと、いつかあっさり騙されて死にますよ、あの子」

長政の歯に衣着せぬ物言いに、綾はふふ、と笑って返す。

「本当に遠慮が無いな。……それ以外に、何か思った事は無いか？あの子の考えや志について、何か思わないか」

「いえ、別に。俺みたいな会ったばかりの屑を守って死のうと思うのはどうかと思いますけど。……そういう事を考える事が出来るのは、純粋に凄いと思いますよ。俺には、絶対出来ないんで」

「……そうか、ありがとう」

そういった綾の顔は優しく、こういうのを母親の顔と言うのだろうかと、長政はふと考えた。しかし、自分の親の顔というものを見た事が無い長政には、分かる訳も無かった。

「静のあの馬鹿が付く程お人好しな性格を、煙たがる者は多くてね。この家にいる者達の中にも、『お嬢様の行動はただの自己満足と偽善だ』と陰口を叩く輩も結構いる。……その癖、この『傘松』の家の跡取りである静に取り入る為に本心を隠して媚び諂(へつら)う者も後を絶

たない。そういう奴らに囲まれて、あの子は育ってきた」

確かに、『自分を犠牲にしてまでも、人を救いたい』なんて言葉を臆面も無く言ってその言葉通り受け取って貰えるのには、静は色々と足りないものがある。若すぎる上に、立場が恵まれすぎている。何不自由なく育った様子の静がそう言うのを聞いて、不快に思う者もいるだろう。

『東京』にこの広大な武家屋敷を所有するほどの財産を持っている『傘松』の家の娘である静に、邪な思いを抱く者がいるのも頷ける。

「あの子も馬鹿ではないから、そう酷い目にあう事は無いが……。家族以外に心を許せる者が少ないのも、不憫でな。昔は何人かそういう相手がいたんだが、今はいなくなってしまってね……」

そう、綾は目を細めながら呟く。そして、ほんの少し寂しそうな表情を浮かべ、言う。

「これは、純粋なお願いなんだが、讀師(よみし)になってもならなくても、君さえ良ければあの子の側にいてくれないか……？　話し相手になってくれるだけでもいい。あの子にとって大事な信念を、否定したり笑ったりしない者がいるだけで、大分違うと思う」

娘を不憫に思い、何かを与えてやりたいと思う母としての願い。だが、長政はそれを一刀両断で切り捨てた。

「……そういう事を静……さんに隠れて言うのは、遠回しにアンタの娘を傷つけるだけですよ。それと、俺の事を買い被り過ぎです」

「ハハ、手厳しいな君は。……済まない、忘れてくれ。これは、た

だの私の身勝手だ」

そう言って、綾は首を左右に振った。一つに纏められた黒髪が、首の動きにつられる様に揺れる。

長政はもうこれ以上話が続かない事を感じ取り、襖を開けた。初夏の昼の日差しが、降りかかる。廊下に出て、襖を閉めようとした瞬間、一言だけ、声が掛けられた。

「色よい返事を、期待しているよ」

長政はそれに答えず、無言で襖を閉める。ぱたんという音が、拒絶する様に響いた。

九、　世間知らずと身の程知らず

「面倒臭ぇ……」

廊下を歩きながら、長政は一人ごちる。

頭の中では先程の話を反芻していた。どうにも、胡散臭いものを感じる。

どうしようかと考えていると、背後から忙しない足音が長政の方へと向かってくる事に気付く。ぱたぱたという、小走りでいても軽い足音。誰のものかは、容易に想像がついた。

長政が振り向くと、足音の主は華やいだ笑顔を浮かべ――それに気を取られたのか、単純に足を滑らせたのか、長政の目の前で、派手にこけた。

べちゃ、と無様な音が響く。倒れ伏したまま身を震わせる小柄な少女を前に長政は少し悩み、結局、しゃがんで手を差し伸べた。

「大丈夫？　静殿」

「鼻を……鼻を、打ちました……」

「ほら、掴まって」

「あう……ありがとうございます……」

「ん、いいよ別に」

ぶつけたという鼻を摩(さす)りながら、静は起き上がる。長政と目が合うと、照れくさそうに笑った。その笑顔から目を微妙に逸らしながら、長政は簡潔に言う。

「俺に、何か用？」
「あ……お母様とのお話が終わったと聞いたので、一緒にお昼ご飯を頂こうと思って」

そういえば、綾が昼食を用意させると言っていた気がする。昼時とはいえ、今の時間は正午を大分過ぎている。長政と綾の話が終わるまで、待っていたのだろうと容易に予想できた。ともあれ、これでこっそり抜け出す機会を完璧に逃した。しょうがないから、二、三日世話になって油断させてから夜に逃げる事にしようと、長政は予定を切り替えた。

「お昼ねー、用意させてるってあんたのお母さんが言ってたけど」
「まあ、そうなのですか？　私は、長政さんに『東京』案内をするがてら、外で食べようと思っていたのですけれど」
「この辺、飯屋なんてあるの？　俺が昨日ここら辺歩いた時は、民家っぽいのしかなかったけど」
「少し歩きますが、三区に近い所になれば一杯ありますよ。牛鍋でも頂きましょう」

そう言い、静は長政の袖を遠慮がちに引っ張った。腹が空き、『東京』について全く知らない長政としてもこの提案は願ったり叶ったりなのだが、一つ問題があった。

「あー……行くのはいいんだけどさ。何か、手拭いか長い布、持って無い？」
「布……ですか？」

珍しく歯切れの悪い言い方をする長政に、静は首を傾げた。何故その様な物を欲しがるのか全く分からない様だった。長政は、幾つ

か意味の無い母音を発し、途切れ途切れに言う。

「髪の色。あんまり、人に……見られたく無くて、さ」

長政の言葉に、静ははっとした顔をした。人とは違う、赤い色をした長政の髪の色。それは、人の中にいて非常に目立つ。限られた人数しかいない家屋の中ならともかく、不特定多数の大勢がいる屋外では、出来るだけ隠しておきたかった。本当は、屋敷の中でも隠していたかったのだが、上京した時に頭に巻いていた手拭いは静の包帯になってしまったし、綾も静も髪の色についても目の色についても何も言ってこなかったので、なんとなく隠す必要性を感じていなかった。

静は、素直に自分の無神経さを恥じた様に、落ち着いた声で言う。

「ごめんなさい、気が利かなくて……。すぐに、用意しますね」

「……ありがと」

部屋から持って来るという静に、長政は自分も付いていくと言った。

廊下を渡り部屋に到着し、静が桐箪笥の中を漁り、手拭いを一本引っ張り出すまで、二人は終始無言だった。

「これ、どうぞ。良かったら、差し上げます」

そう言って、静は紺色の手拭いを長政に差し出した。

「いいの？　こんな高そうなの」

「ええ。昨日、私の手当てで一本駄目にしてしまいましたから」

「そっか。ありがとう。大切にするよ」

長政は、手拭いを受け取り、手早く頭に巻いて髪の色を隠した。前髪も後ろ髪も短く切ってあり、顔の横の髪は少し長いが、耳に掛

ければ殆ど分からなくなる。髪の色を隠せた事で、少し安心した様な表情を浮かべた。ふと前を見ると、静が真剣な表情で長政を見上げていた。黒く輝く大きな瞳に自分の姿が映っているのに気付いた長政は、頭を掻きながら、言う。

「あー……じゃあ、行こうか。お昼食べに」

「はい！」

長政の言葉に、静は心底嬉しそうに微笑んだ。

二人並んで、廊下を歩く。静は何度か横の長政に視線を送りながら、少し躊躇(ためら)う様に切り出した。

「あの……、『東京』は、『外』と違って異人さんも沢山いますから、長政さんが特に何か言われる様な事は無いとおもうのですが……」

「んー……、でも、俺に取って習慣みたいなモンだから。気味悪がられ無くても、やっぱり驚くだろ？　何か聞かれるのも、面倒だしね」

「気味悪がるなんて、そんな……」

「『外』じゃ当たり前だよ。……悪口を言われるだけで済まない事もあるしね」

一説には、『東京』と『外』の技術と文化の差は、五十年はあるという。その事が地方の閉塞感を増し、差別を産み易くしていた。東京では当たり前に受け入れられる洋装・異人も地方では迫害され易い。寧ろ、『東京』では当たり前のものだからこそ、と言うべきか。自分達と違う姿をした、「異端」であるというだけで、罪と言われる。『外』とは、そういう場所だった。

長政は自分の事を生きてきた年数にしては人より苦労してきた方だと思っているが、その苦労の六割が髪と瞳の色が原因によるものだった。苦労の内容については、あまり思い出したく無い。

長政の言葉に、静の表情は沈む。己の短慮を責めている様だった。

「……まあ、あんたが気にする様な事じゃないよ。そうやって気持ち悪いって言ったり態度に出さないだけでも、俺は嬉しいし」

「そんなの、思った事ありません……！」

静はなぜか悲しそうに言う。そして、頭に浮かぶ言葉を、言うか言わないかで思い悩んだ末、おずおずと口を開いた。

「あの、私は……長政さんの髪の色も、目の色も、初めて見た時から気持ち悪いなんて思った事……無いです。確かに、最初はびっくりしましたけど、今は、その、き、綺麗な色だと思いますし……。……好き……です、けど……」

やっとの思いで言い終えて、静は顔を紅潮させて俯いた。恥ずかしさに耐えながら伝えようとした、少女の真摯な言葉。しかし、横の長政は何も言わなかった。

「……長政さん？」

返事がない事に気付いた静は、俯いていた顔を上げ、長政を見上げた。すると長政は腰を屈め、静の顔を覗き込む。長政は穏やかに笑いかけ、その言葉を告げた。

「――ゴメン、静殿の話、良く聞こえなかったよ。もう一回、言ってくれない？」

長政の言葉の意味を理解した静は、顔を先程の比じゃない程に赤らめ、それを誤魔化す様に、裏返った声で言った。

「い、いえ、大した事じゃないので、気にしないで下さい！それより、早くお昼食べに行きましょう？　私、すっかりお腹空いちゃいました！」

そうして、長政を急かす様に小走りで走り出した。心中の狼狽が、足取りに表れていた。

静が長政の事を案じて言ってくれた言葉を、わざと無視した長政は、走る静の後ろ姿に、転ばないようにと声を掛けようとし――

べちっ

「きゃんっ！！」

「あー……」

目の前で予感が的中した事に、深い溜息を吐いた。

「綾様！貴方は一体、何をお考えなのですかっ！」

静と長政が、昼食の相談をしていた頃、綾と長政が話していた部屋には、青年の激昂した声が響き渡っていた。綾は座ったまま青年の話を聞いているが、あまり真剣には聞いていない様で、表情にそれが表れていた。長政と話していた時は背筋を伸ばして正座を組ん

でいたが、今は脚を崩してほぼ胡坐の様な状態になっている。

綾の前で声を荒げている南条は、自分の主が、話を真面目に聞く気が全くないという事を分かっていても、尚こればかりは黙っていられるかとばかりに抗議を申し立てている。

「この、伝統ある『傘松』の家にっ、あんな何処の馬の骨とも分からない小僧を讀師(よみし)として迎え入れっ！あまつさえ静お嬢様の側に置こうなどっ！お言葉ですが正気の沙汰とは思えませんっ！！」

綾はひたすら鬱陶しいと言った顔をしていたが、溜息を一つ吐いて、億劫(おっくう)そうに口を開いた。

「それが何か問題でもあるのか？」

綾の言葉に、南条の顔が一瞬で赤くなる。それは、憤怒の赤だった。

「問題しかありません！あの男とは私も昨夜話をしましたが、本心がどこにあるか分からない様な男です！！　怪しすぎます、とてもこの家に置いて良い様な人間ではありません！」

「話した、ねえ……。寄ってたかって尋問していただけだろう。……まあ、本心が分からないという点には同意するがな。それに、彼はとんでもない嘘吐きだ」

「嘘……？」

「なんだ、気付かなかったのか。あの子の言葉は殆ど嘘だよ。生い立ちも、出身もな。本当の事を言ったのは名前と……後は、数える程しかないな。息をするのと同じ位に嘘を吐くから、見破るのは中々骨だったが」

「そこまで分かっていて、何故……！」

「『怪談』に対抗するのに有効な『力』がある。……それ一つで十分なんだよ。人格に少々問題があっても、それを御する手間を上回る利用価値がある」

綾の、ともすれば冷淡な言葉に、南条はなおも食い下がる。

「し、しかし、そうだとしても何もお嬢様の側に置く必要はありません！」

「……南条、思い上がるな」

静かに告げられたその言葉に、南条は黙せざるをえない。綾のそれには、有無をいわせない迫力が込められていた。

「そもそも長政くんを讀師（よみし）に誘ったのは、静だ。……あの子は甘いから、利用などと考えてはいないだろうがな。あの様子だと長政くんに随分懐いている様だし、静の選択に口を挟む権利は誰にも無いよ。長政くんも静の性分を認めてくれていたし、母親としてもそういう子に預けるのも吝（やぶさか）かではない。……自分の性分を認めて、肯定してくれる相手というのは、意外に大切なものだ」

綾はそう言って、目を細める。優しげなそれは、綾の母親としての顔だった。それに気付かず、南条はしつこく喰いついた。

「それすら、嘘ではないのですか……！」

「いや、あの時の長政くんの言葉は、彼の本心だよ」

「……どういった根拠があってそのような事が言えるのですか」

「女の勘」

一言で切って捨てられ、南条は悔しさに歯噛みした。まるで、相

手にされていない。その事に、漸(ようや)く気付いた。
南条が何も言えずにいると、不意に綾が立ち上がった。大きく伸びをし、南条の横を通って部屋から立ち去ろうとする。南条は慌てて、綾の後ろ姿に声を掛けて引き留めようとした。

「綾様！まだ私の話は……」
「これで、終わりだ。お前は仕事に戻れ。私は部屋で昼寝する。昨日の夜から色々とやらなければいけない事があったからな。眠くて構わん」

そう言って、南条の方を振り向きもせず欠伸をする。

「……しかし、腹を探り合う為の会話と言うのはとてつもなく疲れるな……。景春(かげはる)や就隆(なりたか)の奴はよく日常的にこんな事ができるものだ……。あいつらは一種の変態か？」

『三釘(みつくぎ)』の当主である幼馴染と、その叔父の名前を出し、綾は誰に聞かせるでも無く一人ごちる。もう、南条の存在など頭から消えている様だった。
南条は、これで終わりにしてたまるかと声を一層張り上げる。

「綾様！……お言葉ですが、貴方は御自分の娘に甘すぎます！だから静お嬢様があのような世間知らずの腑抜けに育ってしまうのですよ！！」

部屋を出ようとしていた綾が、その脚を止めた。話を終わらせる事を阻止出来た南条は、立て板に水とばかりに捲(まく)し立てる。

「素性も知れない、信用も置けない会ったばかりの男を家に招き入れるなど、考え無しの愚か者としか言いようがありません。巴お嬢

様が他家に嫁いでしまった以上、静お嬢様がこの『傘松』の家を背負って立たなければいけないのですよ！？　それなのに、未だあの様にすぐ人を信じて周りを振り回して……。とても一人で次期当主の仕事が務まるとは思えません！ですから、」

「『ですから、早急に優秀な婿養子を取り、その者にこの家の全権を預けた方が良いでしょう。世間知らずのお嬢様は、男のいう事に従う細君の方が、向いています。相手は例えば、お嬢様が幼少の頃から仕えている、私とか』」

南条の言葉が、止まる。気付けば綾は南条の方を振り向いており、凍てつく様な視線で南条を見下ろしていた。

「……あ、」

喉の奥が、急速に乾いていく。差異はあれど、自分が言おうとした言葉を先取りする様に告げられ、何も言えなくなった。

「……思い上がるなと、言っただろう。確かに静は馬鹿が付く程のお人好しで、世間知らずだよ。……否定はしないさ。あの子の最大の欠点であり、美点だ。……それを、薄汚い欲を正当化する為に使うな。反吐が出る」

文字通り吐き捨てる様に、綾は言った。蒼白な顔をしている南条を見て、酷薄な笑みを浮かべる。

「私が長政くんを静の側に置きたがるのは、彼の力のせいもあるが、何よりお前の様な人間を静の側に置きたくないからだよ。……それに、別に長政くんは全く素性の知れない人物と言う訳では無いさ。寧ろ、私は彼以上に彼の事を知っている」

「それは、どういう……」

「貴様が知る必要は無い」

ばっさりと切り捨て、綾は今度こそ立ち去った。後には、南条一人が取り残された。

広い部屋に、己の願望も、欲望も、野望も暴かれた青年が一人。

「……クソッ！」

様々な物がない交ぜになった表情を浮かべ、南条は板張りの堅い床を拳で強く殴った。何度も何度も。何度も、何度も。

十、　偽らざる――

『東京』は、簡単に分けると三つの区域で分類される。幕末・明治初期の頃の街並みを残した、民家の多い「第一区」。異人達が多く住み、西洋の街並みを再現した「第二区」。国会や駅など国家の主要な機関の殆どが存在し、多くの娯楽場などを擁して最も栄え和洋が混ざり、ある種混沌とした体を成している「第三区」。明確な壁などで線引きがされている訳では無く、第三区を中心として、そこから西の方向に第一区、東の方向に第二区が広がっている。

人が最も集まり、賑やかなのは勿論第三区だが、第一区にも二区にも、繁華街は存在する。一区の繁華街に並ぶ、どこか前時代的なものを残した店たち。その一つである、「あんぐら」という看板を掲げた牛鍋屋の中に、長政と静の姿はあった。店に入った時には既に一番混む昼時が終わっていた為、悠々と座敷に陣取っている。店の佇まいや内装などを見てもかなり高そうな店の様だったが、「私が驕りますから、遠慮なく食べて下さい」と言う静の言葉に甘え、長政は高級牛鍋を思い切り堪能していた。

「……長政さん、野菜も一緒に食べないと偏ります」
「あんたは俺の兄ちゃんか」

既に自分の分の食事を終え、食後の甘味である白玉あんみつをゆっくり口に運んでいた静が、幾分呆れを含んだような声で言う。
長政が手に持っているめし茶碗は既に三杯目であり、肉もそれ相当の量を食べている。外見からは予想の付かない大食に、静は感心すると同時に呆れる。

「ていうかさ、静殿はあんな少しでいいの？　後でお腹空かない？」
「あなたが食べた量に比べれば、誰でも小食になりますよ……。いつもこんな量を食べているんですか？」

静の質問に、長政はとんでもないと言う風に首を振る。

「まっさかー。スリや盗みじゃこんなに稼げないし、タダ飯は食べられるだけ食べるって主義なだけだよ」

品性を疑われそうな言葉をあっさり吐いた長政は、静が、その言葉を聞いて白玉をつつく手を止めた事に気付いた。心なしか、静の眉間に皺が寄っている。

「スリ……？　盗み……？」
「……ヤベ」

長政は自分の失言に漸（ようや）く気付き、慌てて口を噤んだ。だが、それに効果は見られない。
仕方なく、言い訳の様な事を言う。

「あー……スリっていってもさ、貧乏人とか年寄りとかからは盗ってないよ？　成金の金持ちだけ狙って……」
「それでも、人のお金を盗んだのでしょう……。もしかして、『東京』での生活費も、そうやって稼ぐつもりだったのですか？」
「……まあね」

長政は、歯切れ悪くも肯定した。
静の口から出る言葉は、罵倒か、軽蔑か、一番可能性が高いのは説教か。だが、長政の耳に届いたのはそのどれでも無かった。

「……私は、あなたの事情について詮索する気はありません。そうせざるを得ない理由もあったのだと思いますし……。でも、そういう事は……あなたにして欲しく無いです……」
「……んー、でもさ、俺金無いんだよねー。昨日言ったけど」

悲しげに気づかう言葉をあえて無視する様に、長政は言う。

「それでしたら、昨日もいいましたが『傘松(ウチ)』に来て、讀師(よみし)になりませんか？生活に不自由はしませんから、そういう事をする必要も無くなります」
「あー、あんたのお母さんにも言ったんだけどさ、俺そういうの向いてないよ？他人を救いたいとか思った事無いし、『力』がどうとかも言われたけど、よく分かんないしね」

突き放す様な長政の言葉に、静は少し考え込む素振りを見せ、言った。

「……あなたは何か誤解している様ですが、別に、そういう使命や義務感など無くても、讀師(よみし)にはなれます。突き詰めて言ったら、これもただの職業の一種ですから」
「へえ、そうなの？あんた昨日、『巻き込まれる人々を守りたい、それは自分の命よりも重要だ』って言ってたよね？　それって嘘だったの？」
「いいえ……あれは私の本心で、個人的な考えです。始まりの名目は確かにそういった考えですが、それ以外を目的にしている人も沢山いますよ。中には、不純な目的の人もいますし……」

静は、言葉の最後を濁す。静に取り入ろうとし、あわよくば彼女を狙う者達は、どう見てもそういった考えを持っているとは考えにくかった。そんな静の姿を見て、長政はほんの少し口の端を吊り上

げ、質問する。

「じゃあ、静殿はそういう人を救おうとか全然思ってない奴らが自分と同じ仕事に就いてる事について何とも思わないの？」

「誰が、どういう考えを持っていたとしても、結果的に『怪談』に巻き込まれる人々を助ける事が出来るのは、同じです。……一人でも多くの人が救われるのなら、私はそれに信念があろうとなかろうと、どうでもいいです」

それは、偽る事の無い静の本心だった。「人の命を救う」という結果に主眼を置き、そこまでの過程を切り捨てる。命が助かるのならば、善人に救われても悪人に救われても一緒であり。それを踏まえても尚、静は一人でも多くの人を救いたいと願う。その結果の為の過程には、自分の命すらも含まれていた。例え彼女自身が、死や、痛みや、異形の姿をした化け物に脅える心を持っていたとしても。

詭弁や虚偽の色の無い澄んだ瞳で言う静をちらりと見て、長政は溜息を吐いて言った。

「……あんたさ、変な子だね」

予想もしない言葉に、静は驚き、動揺しながら聞き返す。

「そ、そうでしょうか……？」

「うん。変だよ。ただのお人好しだと思ったけど、ちょっと違う。いや、結局はお人好しなんだけどさ」

「……何ですか、それ」

むっとした顔で、静は言う。長政はそれをただ黙って見ていた。

静は、綾の言う様に、底抜けのお人好しではある。だが、ただ愚鈍に全てを信じている訳ではなく、自分の考えと善意が正義だと思

い込んでいる程愚かでは無い。ある程度は、割り切っている様だった。だが、その反面出会ったばかりの長政に直ぐ懐いてしまう様な甘さと世間知らずさもある。恐らくは、そちらの方が静の本質なのだろう。

それは、とても危うい。割り切った冷静な心と、優しく、稚拙な甘さを持つ感情は不均衡であり、見ている者に危うさを感じさせる。確かに綾の言うとおり、誰かが傍にいた方がいいだろうと感じさせる。だが、その誰かは決して長政では無い。多分。

けれども――

「あんたは、凄いなって思ってさ」

「……」

「俺は見ての通りただのせこいコソ泥だし、助けたいとか守りたいとか思った事なんて一回も無いよ。これからもそうするつもりは無いし。だからこそ、あんたみたいな女の子がそういう事考えて、実際に出来てるのは凄いと思う。昨日、俺は静殿に助けられたしね。……ああ、そういえばまだお礼言ってなかったね。ありがとう」

本当は長政の今までやった事を考えると『せこいコソ泥』では収まらないのだが、それは言わなかった。言う必要も無い。

淡々と喋る長政の言葉を、静は複雑な表情で聞いていた。

「……でも、『宿主』を突き止める事が出来たのは、あなたの力のお蔭です」

「力、ねえ……。そう言われてもなんか実感無いんだよなあ。静殿はさ、俺の力を使いたくて讀師(よみし)に誘ってんの？」

「いえ、確かにそれがあると便利だとは思います。その力があれば、もっと沢山の人々を救う事も出来ますし。でも、私があなたを誘うのは……ただ、お礼がしたかったからです」

「……ん？俺、何かした？」

予想外の言葉に、思わず長政の首が傾いた。

「あなたは、死ぬ事が怖いと思うのは悪くないって言ってくれて……それと、自分を犠牲にして人を救いたいと思っている私を馬鹿にしたり、笑ったりしないで、『凄い』って、言ってくれました。それが、嬉しかったんです、とっても。そんな事言われたの、初めてでしたから」

そう言って、静は微笑む。それはまるで、親に頭を撫でられたのを喜ぶ子供の様だった。

「だから、『傘松（ウチ）』に身を寄せて讀師（よみし）になればあなたの生活の助けにもなるかと思って……あ、でも恩を売るだとかそういうのでは全然無くて、ただの自己満足というか私の我が儘というか……えっと……生活の為とはいえ盗みをするのは褒められた事ではありませんし、でも、あなたが悪いという訳ではなくて…あの、その……あぅ……」

言っている途中に自分でも何を言いたいのか良く分からなくなり、静の言葉は徐々に尻すぼみになっていく。その様子を見て、思わずといった風に長政は苦笑する。

「ごめんなさい……」

恥じらう様に静は俯く。その顔は真っ赤だった。苦笑を顔に浮かべながら、長政は意地悪く言う。

「俺別に深い事とか何も考えずに言ったんだけどさー、正直適当に言ったようなモンだよ？あんたにお礼を言われる程の事でも無いし、ちょっと都合のいい事言われた位でさ、普通そこまで信用しないよ

？」

厳しく、静を貶める様な言葉には本心が半分、嘘が半分だった。静の好意は、重い。その上、面倒臭い。そして、僅かに心地がいい。

長政は、自分の事をどうしようもない人間だと思っている。嘘を付きすぎて何が本心なのか自分でも分かりにくくなっている。人を傷つける事にも、人の物を奪う事にも、特になんとも思わない。他人の不幸にも心は動かされない。笑う事は出来るが、それは空っぽだ。義理や情や義務は少しは存在する様に見えて、その実それは他人の借り物でしかない。不幸だとは思わないが、幸せになろうとも思わない。守るべき物は無い。進むべき道も無い。家族もいない。大切な人は――一人だけ、いる。だが、それだけだ。救いようがなく、下らない屑でしかない。

長政は、眼前にいる静を見る。優しく、眩しく、本来長政が傍にいてはいけない様な少女。けれども、誰かの些細な言葉や行動に救われ、恩義を感じるという感情は、長政にとって痛い程良く分かるものでもあった。

危なっかしいこの少女の傍に立ち、支え、守る様な存在になるのは決して長政では無い。けれども、それが現れるまで、若しくは、静が飽きるまでは――

「――つまり、あんたはただの馬鹿だね。どうしようもない馬鹿」

長々と続いた叱責を理不尽な言葉で締められた静は俯き、見るからに悲しげな表情を浮かべていた。まともな情を持った人間であれば、それだけで謝りたくなる程の悲壮な顔だった。

だが、長政はまともではない。

今にも涙を零しそうな静を前にして、長政は白々しい程の笑顔を浮かべる。長政に少女を泣かせて悦ぶ様な趣味は無い。これはただ騙す為の何も込められていない笑みだ。

「……ごめん、言いすぎたよ」

いかにも困った風に言うと、静は肩を震わせた。もしかしたら、既に泣いていたのかもしれない。だが長政はそれに気付かないふりをし、言葉を続ける。

「俺は静殿の事馬鹿みたいだって思うけどさ、でも、あんたみたいな奴、俺は好きだよ」

それを聞いて、静は長政の顔を伺う様に顔を上げた。その顔は辛うじて涙には濡れていなかったが、哀しみの色が濃い影を落としている。黒い瞳が僅かに潤んでいるのが分かり、長政の胸がざわりと高鳴った。口の端を吊り上げたくなる衝動を抑える。

静は長政の言葉の真意を測りかねているのか、戸惑った様な表情を浮かべ、何も言わない。胸の前で手が組まれているのは、不安の表れの様に見えた。そういった仕草を見ていると、どうにも彼女に仔犬の様な印象を持ってしまう。だから長政は静の視線からほんの少し目を逸らした。

「まあ……静殿が人を守りたいって思ってる事は凄いと思うけど、あんた見てて色々危なっかしいんだよ。だから、さ」

はにかんだ様な笑顔を繕って、そうして長政は、その言葉を口にする。それによって何かが大きく変わる事も知らずに。

「あんたの戦いだとか性分だとかそういうのに、俺も付き合うよ。俺にある『力』でもなんでも、『怪談』との戦いに使えばいい。……助けて貰った恩も、あるしね」

「え……それっ……て……」

静は掠れた声で呟く。長政はただ笑い、静の望む言葉を答える。

「俺も、讀師(よみし)になるよ」

静がその言葉を理解するのに少々時間がかかり――分かった瞬間、彼女の目は大きく見開かれた。

「い、今の言葉…本当…です、か？嘘じゃ…なくて……？」

「うん、本当。だからさ、もうそんな悲しそうな顔しないでよ」

嘘だった。いや、正確に言うのならば、今の言葉の何が嘘で、何が真実なのかは長政には分からなかった。だから長政は、これは嘘なのだと強く信じる。そうすれば、自分は善良な少女を騙し、利用する屑なのだと安心する事ができた。精々甘言を囁いて、利用させて貰おうと考える。いずれ静も、幻想から覚める。長政が好意を向けるにあたらない下らない人間なのだと気付く時が必ず来る。長政にとっても静にとっても、これはただそれまでの気紛れとお遊びに過ぎない。むしろ、そうであってくれないと――困る。

静は長政の心中など知らずに、笑顔を浮かべた。先程まで今にも泣きそうだったというのに、その笑顔には悲しみの残滓は一欠片も残っていない。

身を乗り出して、静は長政の手を握った。

「わ……」

予想外の温かさに、長政はたじろぐ。そして静は嬉しそうに、本当に嬉しそうに笑い掛けた。

「長政さん。これから一緒に、頑張りましょう……！」

長政は、その手を握り返す事も、静の言葉に何か返事をする事も出来ず、ただ自分に向けられた笑顔をじっと見つめていた。何故か目を逸らす事も出来ずに、見つめ続けていた。

第一話「水子桜」　了

序

人形の瞳は何で出来ているのと、イリヤは今自分に覆いかぶさっている男に昔聞いた事があった。男は笑って、硝子玉だよ、とすぐさま答えた。その頃のイリヤは人形の瞳にある種の神秘性を感じていたから、そっけない答えに肩を落としたものだが、今となってはそれを身を以て実感できた。壁に、棚に、ずらりと並んだ人形の顔。眼窩に嵌め込まれた感情を持たない硝子玉は、ありのままに今のイリヤの姿を映し出していた。

男の手が、体を這い回る。肌を探られる不快な感触に、泣き出したくなった。着物の袂が割られ、膝を撫でていた手の平が、徐々に上の方へと移動していく。内腿を執拗に撫でる手は、じっとりと汗ばんでいる。男の荒い息遣いが、この先の行為を促していた。

――嫌だ。

そう思っていても、イリヤの手は事務的に腰に巻かれている帯を引っ張る。着物を留める役目を失った帯は、もみくちゃにされて足下に追いやられた。意志とは関係なしに着物の前を自らの手で大きく開けると、男は満足した様に笑う。

「いい子だ」

男の手が、イリヤの頭を撫で、髪を梳く。これは毎回の儀式の様なものであり、男がイリヤを完全に支配している事の確認でもあった。

「儀式」を終え、いつも通りの行為が始まった。イリヤは、与え

られる刺激と苦痛、屈辱を出来るだけ感じないでいようと努力する。だが、そうしようとすればする程男は激しく責め立て、イリヤの反応を見て楽しむのだった。

嗜虐に歪む男の顔を見ていたくなくて、イリヤは壁に並んだ人形の方へと視線を向けた。自分と同じ、青色の瞳の人形と目が合う。いっそ人形の様になれたらいいのに、と思う。意識か、感情かを失ってしまえばこの苦しみから解放されるだろう。苦痛だけを感じて生きている自分などいなくなってしまえばいい。

だが現実は確固としてイリヤをこの場に縛りつけ、男の唾液と体液が体中を濡らす不快感を突き付ける。

苦痛と嫌悪感で、体が震える。屈辱と絶望で、顔が歪む。どう足掻いても、男から逃げられない事に、涙が零れる。嗚咽を噛み殺そうとしても上手く出来ず、啜り泣くイリヤの姿に、男はより一層笑みを濃くした。興奮した男に細い首を掴まれ、イリヤは叫ぶような声を上げる。

悲痛な鳴き声が響く部屋の中で、幾多の人形達の透き通った瞳だけがその交わりを見下ろしていた。

梅雨時特有の纏わりつくような湿気が、体に絡みつく。毎年の事とはいえ不快なそれに、老人は眉をひそめた。

苛立ち混じりに地面を靴を履いた足で踏みにじる。

朝の早い時刻、緑の濃い森の中に立っているのは老人ただ一人だった。

――否。

地面に転がっているそれを数えていいのならば、二人だった。

そこにいるのは、若い女だったものだ。

食い荒らされ、蹂躙され、肉を咀嚼され骨を引きずり出され腸をまき散らされたそれが元はどのような姿形をしていたかを、老人は良く知っている。

昨晩彼女の父親から娘がいなくなったと連絡を受けた時に、頭の端では覚悟していた事だったが、やはりこうして目の当たりにすると辛いものがある。

死体を発見したのは手分けして山を捜索していた村の若い男で、彼は彼女を見つけた瞬間悲鳴を上げて腰を抜かした。

彼は今、娘の無事を祈る彼女の両親の許へ、一番望まれない答えを告げる為に向かっている。蒼白な顔をして今にも卒倒しそうであったが、役目を言い渡すと、泣きながらも頷いた。

――酷な事をさせた、と思う。けれども、彼を死体の側に置いて

おく事も出来ない。仕方のない事だった。

人手不足を痛感するが、禄に事件の起こらないこの小さな村に駐在は二人もいらない。実際、こうして偶に喰われてしまった骸が転がる以外は、至極平和な村なのだ。

――人死にを出しておいて、何が平和だ。

自嘲の意味も込めて、老人は溜息を吐く。

昨夜散々村をかけずり回り、今日は陽の昇らない内から山を歩き回っていた。疲労が澱の様に体に溜まっているのを感じる。若くない体は、消耗するばかりだ。彼女の両親がこの場についてから起こる事を予想すると、休む暇など老人には無いだろう。

老人は再び溜息を吐き、物言わぬ彼女の方へと視線を移した。

美人ではなかったが、華やかで明るく、人に好かれる娘だった。変わり果てた彼女の姿を見て悲しむ者は多いだろう。

偏屈な所がある老人にも、彼女は屈託なく話しかけてきた。この村に赴任してきてすぐの事だったから、もう八年も前になる。その当時から跳ねっ返りな所があったが、粗暴さは感じられず、見ていて気持ちのいい娘だった。

決して、この様な死に方をしていい娘ではなかった。

人は生まれも死に方も選べず、さりとて生き方も思うようには出

来ない。

それでも、こんな死に方はあんまりだ。

行き場の無い怒りと、無力感。そして、疲労。それらが老人の肩にのしかかる。彼女の父親は、きっと老人を責めるだろう。元はと言えばお前のせいだ、と。

老人は今まで周りの者にそう言われる度に否定を返してきたが、今回ばかりはそうだ、と認めてしまいそうだった。

あんな事をしなければ、彼女はこんな死に方をせずに済んだのではないか。そんな思いが、老人の頭にこびりついていた。

どうにも息が詰まって、老人は空を見上げる。雲が重く重なり、どよりとした色を見せていた。一雨来そうだ。

憂鬱さが増し、老人は三度目の溜息を吐いた。

?

一、 村へ

がたん、と車両が大きく揺れる。長政は読んでいた書類の束から顔を上げた。

「読み終わりました？」

「大体ね」

向き合った反対側の席に座る静に聞かれ、長政は短く返した。

書類の文字列から目を離し、車両の中を見回す。人は殆どいない。長政と静を数に入れても、ほんの四、五人程しか乗っていなかった。無理もない。『外』から『東京』へと向かう列車だったら溢れる程の人が乗っているだろうが、この列車はその逆だ。季節は梅雨時の六月。盆でも暮れでも無い中途半端なこの時期にわざわざ『東京』から『外』へと向かう列車に乗る人間はそう多くは無かった。

斜め前の席の、退屈そうにしている男と目が合ったが、長政の緑色の眼を見て、そそくさと目を逸らした。気持ち悪いと思ったのか、関わりたくないと思われたのか。どちらにしろ、今更その程度の反応に傷つく様な心は持っていなかった。

くあ、と欠伸をして目線を書類の紙束に戻したが、どうにも文が頭の中に入ってこない。何度か頁をめくるが、とうとう諦めて長政は紙束を自分の膝の上に放り投げた。

「ちゃんと、全部読んで下さいな」

蜜柑の皮を剥いていた静が、咎める様に言う。とはいえ、そう怒っている訳でもなさそうだ。

静は蜜柑の白い筋を丁寧に取って、半分を長政に渡した。

「ありがと」

腹は空いていなかったが、ありがたく受け取る。一房口に放り込むと、酸っぱさだけが口に広がった。皮は橙色をしていたが、中身は青かった様だ。甘みの欠片も無い。静の方を見ると、彼女もまたこの酸っぱさに閉口している様だった。可愛らしい顔を、なんともいえないといった表情で彩っていた。

「食べたげよっか？」

「だ、大丈夫です」

「強がってもあんまりいい事無いと思うけど」

「うう……」

渋い顔をしながらも、それでも静は意地を張って二つ目を口の中に入れる。鋭い酸味に泣きそうな表情を浮かべた。

蜜柑相手に格闘している静の表情を肴に、長政は二つ目を口の中に放り込む。こころなしか、先程より甘みが増した様な気がした。

車窓から見える景色は、次第に緑が濃くなっており、『東京』から離れている事を知らせる。久しぶりに見る『外』の景色は、別段何も変わった所は無かった。寧ろ、変わったといえば自分の方かもしれない。長政は目の前に座る少女の方へと一瞬だけ視線をやって、それを否定する様に窓の外へと戻した。

長政が静と出会った日から、二週間が経っていた。上京した日に

立ち寄った寺で『怪談』なるものに巻き込まれ、その中で長政は静に誘われ「讀師」となった。今は彼女の家に居候している。静の母親であり、讀師の御三家の当主である綾の言葉では、長政の目にある力は、「怪談」に対抗するのに非常に有効な道具であるらしかった。正直自分に特別な力があると言われても長政には全く実感が無い。「讀師」となったと言っても、この二週間静と共に『東京』を歩き回って、「怪談」が発生すると言われている場所で見えたものを報告する事位しかしていない。その他は長政の見たものを手掛かりに考えを巡らせている静の横で、彼女の飼い猫と戯れるか、考えに行き詰った静の気分転換の話し相手になる位だ。静が言うところにはそれだけで十分助けになっているらしいが、「働かざる者食うべからず」が信条の長政としては、落ち着かないものを感じる。とはいえ、長政の「働く」という言葉の意味は、相手を飢えさせない程度のスリや盗みなどが大部分を占めてはいたが。

身寄りも目的も、ついでに金も無い身としてはそれだけの事をするだけで衣食住が保障されるのは有難い。おまけに、幾ばくかの給金も貰えている。だが、どうも自分がヒモか何かになった様で落ち着かない、すわりが悪い、と何の気なく綾に零したのがつい二日前。その翌日には、静を通して「関東の外れの寒村に出向き、『怪談』の有無を調べて来い」という命が下されていた。気を使われたか、体よく押し付けられたか。恐らくその両方だろう。長政としてもこれ以上適当に街を歩き回って家では猫と戯れる様な生活を繰り返すのは嫌だったので、経緯自体は別にどうでもいい。それはどうでもいいのだが、

「長政さん、どうしました？」

「んー……」

長政が浮かない顔をしている事に気付いた静が、蜜柑を食べる手

を止めて尋ねる。彼女の手に残る蜜柑の房が最初の半分程に減っている所に、静の頑張りが感じられた。

「あんたのお母さんは、何を考えてこんな仕事を寄越したんだろうと思ってさ。よりにもよって、この俺に」

与えられた仕事は、野犬による死亡事件が多発している村に行き、それが「怪談」によるものなのかどうか調べて来い、というものだった。それ自体は、そう難しい仕事ではない。こういった情報収集は、人の口を伝わって広まる「怪談」を補足する為には必要な仕事らしく、「怪談」に対して戦う手段を持たない讀師は、殆ど情報収集や調査を主な仕事としているそうだ。特別な力があるとはいえ知識も経験も乏しい長政にとりあえずで与えるには適した仕事だろう。

問題は場所と、長政の容姿にある。

『東京』と『外』の文化や風習、技術の格差は凄まじく、一説では五十年分の差があると言われている。『東京』が華やかで開放的な場所であるならば、その『外』は前時代の遺物を受け継ぐ、排他的な場所だ。他と違う事は異端であり、異端は迫害される。それが当然とされている場所であり、それを許している個々の小さな社会で出来ている。その社会の和から外れない事が絶対の正義となっているのだ。

対して長政の容姿はと言うと、明らかに異端のものだった。顔立ち自体は極々普通だが、目は深い緑色をしている。今は紺色の手拭いで隠されているが、頭髪はこれ以上無い程人目を惹く赤だ。それらと比べるとまだ目立たないとはいえ、六尺を越える長身も人によっては奇異に感じる要素となる。どう考えても、偵察や調査には不向きだった。せめて『東京』内だったらそれなりの働きが出来るかもしれないが、行く先は関東の外れの閉鎖的な寒村である。村民が

目を合わせてくれるかも怪しい。

「多分、お母様は長政さんに別の働きを期待しているのだと思いますよ」

溜め息混じりの長政の疑問に、静は手の中にある蜜柑をつつきながら答える。

「調査をして報告をするだけなら誰にでも出来ますけど、長政さんには他の人には無い能力があります。今まではただ『見て』報告するだけでしたけど、あなた自身が『怪談』に接して、どう行動し、どんな結果を残すのかを試したいのだと思います」

「試す、ね。そう言われても、俺にはあんた達が言う様な特別な力を持ってるって言う実感がイマイチ無いんだけど」

「まあ、何故ですか？」

静が、可愛らしく首を傾げる。

「何故って言ったってさ、無いものは無いよ。俺の力っていうのは、直接『怪談』や『宿主』を倒せる様なモンじゃないんだろ？偶にあんた達に見えないモノが見えるだけだ」

「その『偶に見えるモノ』が重要なんです。あなたが見るモノは、『宿主』に繋がるモノ。『怪談』を読み解く時の、大きな武器になります。お母様が、言っていたでしょう？」

「……そこが分かんないな。俺が見たモノが無くても、最終的にあんた達は『怪談』を倒せるんだろ？助けになるかもしれないが、『

武器』になるとは到底思えないね。『宿主』を直接見付けられる訳じゃなし、精々手掛かり位のモンだろ」

「その、手掛かりが私達の強力な武器になるんですよ」

「へー、どうして？」

「……『怪談』を読み解くという作業は、霧の中を目隠しして手探りで歩く様なものです。何が正しくて、何が間違っているのか。どこが繋がっていて、どこが途切れているのか。そういうのを考えて考えて、そうだと思う理屈を何個も何個も考えて、それでも間違いがあったら、また一から考え直す。そういう作業です。……時間が掛かった分だけ、『怪談』の犠牲者は増えていきます」

静はほう、と溜め息をついた。

「読師の役目は、『怪談』の犠牲を食い止め、人々を救う事です。だから、私達は迅速に、正確に『怪談』を読み解かなければいけません。その為の大きな手掛かりを見る事が出来るあなたの力は、遠回りですけど、人を救える事の出来る力です。……『武器』というよりは、『案内役』とでも行った方がしっくりくるかもしれませんね」

「『案内役』ねぇ……」

「まだ納得が行きませんか？」

今一釈然としない、といった顔をしている長政を見て静は苦笑を零す。

「現に、あなたが見た手掛かりのお陰でこの二週間で四件の『怪談』が解決しています。しかもその内の二つは犠牲者の無い状態で『宿主』を潰す事が出来たんですよ？」

「それって、何か凄いの？」

「凄い事ですよ。普通はもっと時間が掛かりますし、そもそも犠牲者が出ないと『怪談』の存在自体に気付かない事も多いですから……。だから、もしあなたに実感が無かったとしても、自分にそういう力があるという事自体は肝に命じていて欲しいです。その力は、私達にも、あなたにも、大きな意味がありますから」

そう言って、静は微笑んだ。陰気な車内の中で、そこだけが一瞬華やいだ気がした。長政は、気付かれない程度に僅かに目を逸らす。どうにも、目に毒だ。

「……分かったよ。一応、静殿の言った事は覚えとく。まあ、なんだ。俺の仕事は結局は同じなんだろ？」

「そうですねえ。情報収集は私の役目だと思いますし、形としては今まで通りですね。ああ、でも、今回から長政さんにも『怪談』を読み解くのには参加して貰いますよ」

何の気無しに言われた一言に、長政は目を剥いた。

「えっ……マジで……？」

「大マジです。大体、長政さんこの二週間ずっと牛若丸と遊んでばっかりだったじゃないですか。それで働いてる実感が無いだなんて、可笑しな話です。『働きたい』と自分から言った以上、それ相応の

事はして貰いますからね？」

「いや……体使うのは得意なんだけど、ちょっと考え事は苦手で。俺頭悪いし、静殿一人でやった方が捗るだろ？」

「そんな事ありません！どうして……そういう事を言うんですか」

言い訳じみた長政の言葉を聞いて、先程の笑顔からは一転して静は表情を曇らせる。長政に向ける視線もどこか厳しいものがあった。

「あー、もしかして怒ってる？」

「いいえっ、別にっ」

否定はしているが明らかにへそを曲げている。ぷい、と横を向いてしまった。

参ったな、と長政は頬を掻いた。考えてみれば、長政の言葉は静に、自分は手伝わないから一人で働けと言ったも同じだ。それは確かに、腹も立つだろう。考え事が苦手なのは本当だが、ここは適当に話を合わせて静の怒りを収めておいた方が良いだろう。

「ゴメンね、静殿」

「……」

「俺馬鹿だから役に立つか分かんないけど、ちゃんと手伝うからさー。だから、機嫌直してよ。ね？」

「……私は、別に怒ってなんかいません」

静は明らかに不機嫌だった。とはいえ、威圧感は全くない。白い頬を膨らませて眉間に皺を作っているが、どうにも頬袋にものを詰め込んだリスか何かに見える。

「嘘だあ、怒ってるって。だからさ、さっき言った事謝るよ。あんたの事ちゃんと手伝うしさ」

静は横を向いていた顔を戻し、媚びへつらう様に謝る長政の顔を見た。何かを探っている様な目をしていた。

「……？俺の顔、何か付いてる？」

「いえ……」

静は、長政の顔をじっと見つめる。黒い瞳に、見透かされている様な気がした。いい加減長政の居心地が悪くなってきた頃、静がはあ、と深く溜め息を吐いた。それは何かを諦めた様な、悲しんでいる様な色を含んでいたが、長政はそれに気付かなかった。

目が合ったので長政が笑みを貼り付けて返すと、静は一層表情を曇らせた。だが、直ぐにそれを隠す様にやや無理をした笑顔を浮かべる。

「……ちゃんと、私と一緒にお仕事をしてくれるなら、怒ったりしませんよ」

「……やっぱり怒ってたんじゃん」

「違いますってば」

静の笑顔にはどこか陰りがある。それが十中八九自分のせいである事は流石に分かったが、どうすれば良いのか長政には分からない。

――どうも、静とは上手く会話する事が出来なかった。

聡い彼女の事だから、長政の嘘や誤魔化しなどとっくに見抜いて

いるだろうに、何も言ってこない。それどころか、ほんの些細な事でも会話の糸口を見つけて話しかけてくる。その癖、長政の過去を詮索する様な事は言わなかった。

長政から言うのを待っているのか、若しくは特に気にしていないのか。どちらにしろ、えらく調子が狂う。

面倒臭い、煩わしい。――そう切り捨てられれば楽なのだが、そう思う事は躊躇われた。

結局何を言えば静の顔に落ちる陰りを晴らせるのか分からず、長政は無言で窓の方へと視線を移した。

梅雨時だというのに空は青く、雨は降りそうにない。

車両がまた、がたんと揺れる。次の駅は、もうすぐだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9374w/

東京怪談　～仮想明治幻想奇譚～

2011年11月20日00時10分発行